

2025年

# 文芸ふじさわ

第 59 集

文  
芸  
ふ  
じ  
さ  
わ

第  
59  
集

藤沢市教育委員会・(公財)藤沢市みらい創造財団



# 文芸ふじさわ

## 第 59 集

### 表紙のことば

#### A級ディングー・日本ヨット文化の曙

寒い一日でした。

絵の題材を求めて、ヨットハーバーへやってきました。

江の島湘南港ヨットハウス(通称)。りっぱな建物です。昭和39年の東京オリンピックのヨット競技会場として整備され、以後50年経ち新装しました。

敷地の一角、海に面する場所に一艘の木造ボートが置いてあります。2人乗り用の小さな船です。

名称は「A級ディングー」

はて、何のこと。

管理事務所の女性の職員の方にお尋ねしたら、わざわざ外へ出てその船の前で説明して下さいました。やっと了解。

ディングーとはエンジンを持たない、手漕ぎ人力帆走船を指すのだそうです。

初めて知りましたが、このボートが日本のヨット競技の発祥と礎に寄与した大本だったようです。

歴史を繙くと、1932年(昭和7年)に日本ヨット協会が設立に際し、ヨットマン育成の為、英国人Cockshott設計の12フィート・ディングーの製造権を導入し、公認レース艇として広く国内建造を進めたのが始まりとされています。…中略…

以後A級ディングーのレースは細々ながら存続、1991年(平成3年)全日本レベルの大会として、逗子湾で選手権が復活、2015年の西宮大会(25回目)に至っています。

こんな小さな木造船にそういう歴史があったとは、しばし感慨。

太平洋、大西洋に船出した日本の海洋人達も最初はこのA級ディングーで練習したのかもしれませんが…。

ここに立ち寄られたら、この小さなボートを是非ご覧になって下さい。操舵している自分に出会えますよ。

絵と文 蓮池 高夫

## 目次

### 表紙のことば

「文芸ふじさわ第59集」によせて

|        |     |
|--------|-----|
| 短歌     | 7   |
| 川柳     | 19  |
| 俳句     | 39  |
| 五行歌    | 73  |
| 現代詩    | 85  |
| 随筆     | 93  |
| 編集後記   | 140 |
| サークル紹介 | 146 |

## 「文芸ふじさわ第59集」によせて

藤沢市教育委員会

教育長 岩 本 将 宏

「文芸ふじさわ第59集」が発行されますことをお祝い申し上げますとともに、長きにわたり、文芸を愛されるみなさまとともに、発行を継続してこられたことに心から敬意を表します。「文芸ふじさわ」は、市民のみなさまが、「短歌」「川柳」「俳句」「五行歌」「現代詩」「随筆」の創作活動を通して、自分の思いを表現し、その作品を多くの方々に披露し、その作品をお互いに鑑賞しあう場となっています。

「文芸ふじさわ」のような文芸誌を読むことの魅力は、「ふと目にした文章との出会い」ではないかと思います。収録された作品にたまたま出会い、雷に打たれたように感動したり、自分の心境にぴったりとマッチした文章を見つけたりした時の喜びはひとしおです。自分の気持ちを後押ししてくれるような、自分の考えを肯定してもらったような頼もしい思いになれることも作品との出会いの大きな魅力です。作品から新しい気づきを

もらったり、勇気をもらったりすることも多くあると思いますし、落ち込んだ気持ちに寄り添い、励ましてくれる作品との出会いもあるかもしれません。

また、逆に作品をつくるときには、自分の気持ちをどのように表現したら読む人の心に響くのか、文字数の制限の中で、多くを書かないからこそ想像力を掻き立てる表現を工夫するなど、作品づくりの魅力は無限に広がるのだと思います。そうして、作品づくりで切磋琢磨する仲間が交流できる場が、この「文芸ふじさわ」であり、そこに文芸を愛する人たちの「学びの環・人の和・元気の輪」が生まれていると感じます。

毎年、たくさん寄せられる作品を編集委員のみなさまが心を込めて編集され、発行されています。「文芸ふじさわ」が長年にわたり発行を続けてこられたのは、愛好者のみなさまが熱心に作品の投稿を続けてこられたことと、編集委員のみなさまの努力によるものです。みなさまには、この「文芸ふじさわ第59集」を心ゆくまで堪能していただきたいと思います。



# 短 歌

犬山俊昭  
(花舟短歌会)

アブラナの映る川面に子ガモ二羽寄り来る鯉に備えていたり  
雨蛙十段飛びしてようように舗道渡りぬこの大日照り  
電線に椋鳥数十ことごとく風上に向け頭並べる

植田稔

愚かにも読むこと出来ぬ友の書に道を極めた風雅を感じず  
木版に一色載せつつ和紙を摺る像の浮かびは白地の力  
校歌には「誠を守る」佳詞がある我れを導く羅針盤なり

大澤清水

川岸の桜舞ふたび川ごへの我が庭芝へ送り来る風  
駅までの公園二つ満開のサクラサクラに電車見送る  
百日紅風に削がるる枝や葉の花も幾年傷みにゐたり

小 笹 岐美子

始球式終えてマウンド降りてくる背中に長いおさが踊る  
連日の熱帯夜に倦み見上げれば雲間にきりりと織月光る  
辛き日にまじないのように歌いたる「時代」はすっかり私の十八番

加 藤 和 彦  
(なぎさ短歌会)

涼風に穂先たわわや大庭の水田<sup>た</sup>豊作であれコンバイン行く  
十五夜に栗の裾分けさあ茹でむ水に浮くこの一つを除き  
連れ合いを亡くせし友と語るとき同情でなし励ましでなく

唐 沢 小夜子

亡き父の愛した庭木が消えゆきて鳥の運びし種が芽吹けり  
昼顔の絡まり咲ける路地裏に建設現場の音響きくる  
公園そうじ途中で帰る吾れに寄す温かき声名も知らぬ人

木 村 恵 理

雨戸開けおはようさんと赤桃黄 元氣色した仏桑華<sup>ぶつそうけ</sup>の花  
散歩道金桂<sup>きんか</sup>の香り誘導し初めての道晩秋の風  
三時起き着物姿で雨模様 京都に向い秋晴れの空

黒 田 良 子

酸欠に似たるおもいに日々過ぐす空気のような君の居らねば  
四季という言葉の感覚あいまいで春の夏日に秋の真夏日<sup>こほ</sup>  
涙かとよひらに光る雨しづく紫陽花はとり零<sup>こぼ</sup>して擡<sup>もた</sup>ぐ

佐々木 波 透

(渡内きらり四季の会)

シグナルを顎<sup>あご</sup>上げて走る女児<sup>をみなこ</sup>に夏の風吹く背押<sup>せな</sup>すごとく  
回診<sup>わしん</sup>に患<sup>わづら</sup>ひのこと説き給ふわが医師の言<sup>こと</sup>すがしく聞きつ  
倒伏<sup>とうふく</sup>の稲穂を前に農夫らはただうなだれる風の立つ午後

鮫 島 美和子

(なぎさ短歌会)

阿蘇の野に放たれ牛は駆け出せりぴよつこんどつとん春のステップ  
湯浴みする人を待つ間にとろりとろり別府の浜の春の波音  
時計草咲いて齢をまたひとつ重ねて仰ぐ水無月の空

塩 崎 麗 子

(湘南藤沢短歌会)

手折りきて部屋に活けたる黄水仙その明るさをひと日楽しむ  
坂に立ち眺むる遠き山桜今年も我の春はととのふ  
煮立ちたるチゲ鍋ひたすら食む夫の旨さの決め手は熱いことらし

須 田 とし子

過ぎし日の映像ばかり浮かびくる恋人の丘 龍恋の鐘  
二階から見ゆる大木日を増して新緑濃くなり生命力満つ  
セルフレジ昔は遠目に眺めおり今はスイスイ ドヤ顔となる

高 橋 美津子

デイケア八月皆勤施設長ほめ拍手くるるヒマワリ揺れて  
右肩に腫瘤こぶし大MRIに縁のみ写りガングリオンとか  
伴奏者の孫紹介のアナウンスにその父の時の音蘇える

竹 中 亮 子

式典後振袖姿見て欲しと訪ひ来る孫のショー気取り愛し<sup>は</sup>  
落日を口に咥<sup>くは</sup>へて尾鰭撥ねくぢらぐも浮かぶ茜の空を  
夕散歩の足のばしゆき紫木蓮風に膨らむ町に迷へり

田 村 孝 子

幸せは気づかぬままに通る過ぐ鉄橋渡る春風のように  
生かされて生きる喜び探しつつ今を生きてるそれが幸せ  
川端に木守り柿を見つけたたり習わし残る冬の優しさ

戸村 忠子

膝痛め頼れる先に貼り薬超音波に励むりハビリ  
響き合う吹奏樂に晴れ姿バトントワや藤沢まつり  
地震禍に追い打ち掛けて水害や自然脅威と撓う心に

豊岡 芳隆

雲間から折り折り洩るる月ひかり街の灯ともし虫の声する  
断崖の地球岬は朝焼けて青き海原オレンジに染む  
月日たちホームに慣れし我が妻はパパの顔よりおやつに笑顔

中川 節子

永らえば永らうほどに故郷は臉の裏に「昭和」を映す  
ふるさは昔嘶の如くなり寂しき極み「限界集落」  
老いてこそ想い出深む古里や生家今日より無人となりぬ

中田 栄子

つややかな柿の若葉のまばゆさよ五月の風に吹かれてゆるる  
柿の葉は色さまざまに燃え尽きて晩秋の庭の面を彩る  
夕闇のせまり来る中ツワブキの花は黄色の明かりを灯す

濃霧

(藤沢翔陵高等学校)

お財布の軽さに驚く黄金山3日坊主でリバウンドオチ  
食卓で「余りやすいの?野菜らしい」今はこんなに美味しいのね  
お菓子箱夢がつまった玉手箱開けて悔しき一家団欒

早坂 尚輝

(藤沢翔陵高等学校)

葉もて虫を殺さば鳥鳴かぬ沈黙の春来るといふ本  
老桜咲けば心に今生の苦も祝ぎ歌となりて響かう  
自らの輪廻転生見るとき現世の外の蝶の羽化かも

松 浦 みどり

(湘南藤沢短歌会)

「薄氷<sup>うすらひ</sup>」とふ菓子つくらむか紅梅の花のひとひら求肥に透かして  
白藤の香のたをやかな春日なり蜜吸ふ蜂の羽音長閑けし  
暮れやらぬ夏空にかかりてゐる月は透かし模様のガラスのうつは

森 睦 子

桜散る砂場に遊ぶ幼子ら花びら集め春を遊びぬ  
孫も子もわれの背をぬき遠のきて昔懐かしむ子どもの日なり  
夕暮に東の空の満月にしばし佇み暑さ忘れし

山 本 澄 子

(九月会)

人も草も猛暑日続き萎<sup>な</sup>えたる昼真すぐに立てる緑の黒松  
島好きの夫と渡つてみたかった江の島までのトンボロの道  
平凡なわたしだつていいじゃないポテサラ美味しく作つて食べよう

川

柳

愛 子

(鶴沼川柳同好会)

少年の眼キラリと夢語る  
朝さんぽ風が体を吹き抜ける  
半額のシール貼る手を待つて買う  
先に行く伝言板に知る破局  
朝日受けダイヤに優る芝の露

赤 堀 晶 子

(六会川柳会)

萎えそうな心鼓舞する予定表  
特別のおもてなし等要らぬ仲  
土用の丑に義務はないのに鰻食べ  
長短所併せ持つて得手不得手  
筆不精益々遠くなるポスト

あ き ら

(辻堂川柳会)

年金者ステーキ食えず鳥貴族  
初心者相場読めずに大損す  
所詮は人寄せパンダ進次郎  
石さんのネバネバ談義大嫌い  
泥船の岸破政権SOS

雨 宮 則 子

(湘南台川柳会)

温暖化海岸線が溶けていく  
デジタルの本を開くは指の腹  
お名前を思い出しつつあいづちを  
チャリンコのママの手外すもみじの手  
熟睡の重くて温い抱っこ紐



いさを

市川嘉紀

(辻堂川柳会)

マージャンで勝つには顔は無表情  
煽てられ過ぎて来たな半生を  
お安くと言われ余分に買い求め  
わくわくは何処かに忘れ見つからず  
樹木延び住む人無いが税払う

(鵜沼川柳同好会)

揺りかごの寝顔を風がそつと撫で  
人生ははかないと言いいく食べる  
土砂降りに落ちたスマホが鳴っている  
人並みに合った歩幅で転ばない  
妻の留守何故かわくわくするのです

石川正明

井上朗

(湘南台川柳会)

こいのぼり子どもの頃は高かった  
桜見て成長したか自問する  
必要かクーラーあつて夏休み  
会議中顔を伺い物申す  
セーフだが騒がぬ矜持プロの技

(川柳こぶしの会)

ITのベンチャーが行く初詣  
近頃のイケメンみんな同じ顔  
図書館へ通い冷房読んでいる  
マスク盗れる高さに仕立てられ  
検査して異常見付けて恙ない

井上朗

小野敬子

(六会川柳会)

人生は山や谷ありのり越える  
桜咲く社会人へと歩き出す  
弁当で胃を握られたありがとう  
生きて行く希望と夢を胸に抱き  
手こずるがやりがいあるな物作り

(六会川柳会)

新札は出たが家計に変化なし  
ふさふさねカツラなのかと友が聞く  
大安に検診結果聞きに行く  
じつちゃんはキラリ金歯を見せ笑う  
家出して毛なみ良くなり戻るタマ

岡本昌代

菊地政勝

(湘南台川柳会)

侘しさもまたごちそうと山の宿  
派手な羽衰しいオスの晴れ姿  
巨岩さえ水一滴に碎かれる  
屋根落ちてなお堂々のバルテノン  
じわじわと私の影が老いていく

(湘南台川柳会)

男らしく女らしくは消えてゆく  
永遠の誓い忘れた横恋慕  
思いだし笑いを妻に咎められ  
見たような浄土を語るお坊さん  
AIにあの世の様子聞いてみる

今日一

熊田松雄

(川柳こぶしの会)

値上げされいくら減らす年賀状  
財産は無いが負債も無い気楽  
待ち合わせミスの出ぬよう文字メール  
ゆつくりと生きてばかりじゃ後がない  
申告で改めて知る所得額

日下部 いくお

ケ イ

(湘南台川柳会)

孫生まれ無精男の好好爺  
部長との酒席は遠慮泣き上戸  
模造品鑑定団の鋭い目  
一応は打診夕餉のリクエスト  
グループを孫に贈って描く夢

食べる買う景色二の次バスツアー  
お題受け寄席の紙切り客わかす  
近未来コオロギまでも食材か  
水槽の海月キュートなスケルトン  
常套句余裕あつてもとり急ぎ

権田 藍

島津 富弥

(湘南台川柳会)

心配をくばって歩く孫二人  
お互いに傷を見せあう武勇伝  
傍にいて叱咤激励子の言葉  
復興の足がかりにとボランティア  
極楽とまごう介護で歩けない

笹原 英美子

尚 風

(湘南台川柳会)

温暖化節目つかない春夏日  
顔見知り名前浮かばずねえあなた  
みな仕事平日ランチシニア族  
散歩だよベット誘うも顔そむけ  
バスゆられ思わずつかむイケメンを

(湘南台川柳会)

喜怒哀楽いつも二で割る妻といる  
地球より重い生命の軽い価値  
四捨五入されない位置の疲労感  
底抜けの笑顔もあつた災害地  
陣笠も総理も同じ抱負談

災害にめげぬと始業ベルの音  
思いやり重ね支援の輪ができる  
千年を生きてこの地の御神木  
戦争は愚かと知れとヒロシマが  
偽サイトさわり闇へと導かれ

菅 沼 雅 彦

ことばより爆発物が勝る日々  
あじさいは忍者を越えて七変化  
あら不思議夏日が続く春なのに  
OB誌最初に見るは計報欄  
上がるのは物価血圧まだあるよ

鈴 木 有

（辻堂川柳会）  
一つまみ嘘を加えて世を泳ぐ  
伝言板つないだ今は孫五人  
虹紡ぎ横糸にして明日を織る  
陽だまりで話し相手の猫あくび  
女房には今も言えない母の味

田 中 邦 彦

きつかった婚約指輪ゆるみだし  
軽口の中にも本音のぞいてる  
壁の傷隠す名画のカレンダー  
食欲はないがお酒は別の口  
いつの世も敬語で話す義理の仲

近 下

（辻堂川柳会）  
まだらボケサブリパワーで甦れ  
コンピュータ俺はいつまで新米だ  
冥土へと背負<sup>お</sup>う荷物の多い事  
断捨離はあなたが先と妻が言う  
絵空事それでも聞いて俺の夢

妹 尾 安 子

（六会川柳会・鶴沼川柳同好会）  
邦人の頑張り嬉し相撲界  
踏まれてもすぐ起き上がる草の意地  
見ぬふりや聞こえぬふりも知恵のうち  
雑談の中にもキラリ生きる知恵  
富士山に一番似合う服は雪

竹 花 敏 夫

（湘南台川柳会）  
裏金でできたバッチが闊歩する  
選挙戦うまい話をする期間  
公約は破れ空しい秋の陣  
AIが人の社会を支配する  
民主主義国家にもいる独裁者

塚 本 有 子

（湘南台川柳会）  
不都合はすべて略して見合い席  
表札にペットの名前並べ書く  
気まぐれな電話で不用な物を買  
失敗が可愛く見える年を越え  
リスクなど問題外と正義漢

戸 澤 千 鶴

（湘南台川柳会）  
屋根裏のねずみを知らぬ令和の子  
熱き夢抱き覚悟の過疎移住  
繁華街顔見て配る誘いビラ  
大将の気分で開ける縄のれん  
孫生まれ何のかんのと義母が来る

としを

(なぎさ川柳会)

なぜかなあエスカレーター急ぐ足  
この人生テレビと共に今が有る  
ビデオでの判定に客受け止める  
採血に温もりのある優しい手  
大谷に元気を貰うロスの街

長嶋 富士子

(湘南台川柳会)

脳手術リスク考え決めかねる  
気まぐれな話はうまく受け流し  
思い出は良き事のみが胸に満ち  
春風よ私の脳に辞書詰めて  
わがままを気付かぬ歳になり気楽

長屋 比佐子

(湘南台川柳会)

産道を出でて大泣き感謝の日  
しとやかな振りして我が意成し遂げる  
撤饌を節分毎にくれた母  
還暦を祝いつ祓う厄の年  
父が逝きずつしり重い不動産

西村 雅子

(六会川柳会)

抱き上げて楽しんだ子は今スルー  
折り鶴は脳と指先結んでる  
老化です医師の一言やる気折る  
停車場で待つ母の場所あの辺り  
泣いた後さわやか笑顔友ピース

のどか

(辻堂川柳会)

町内でここにもあつた空き家だよ  
空き家増高齢者では借りられず  
新米は買えない高値食べたいな  
コメ不足現れたのは高値米  
朝だから下りは順調東名道

はじめ

(鶴沼川柳同好会)

箸付ける前にスマホに先ず見せる  
門前にさりげなくある椅子ひとつ  
命まで預けてしまう空の旅  
根を張って草が教えるど根性  
本名は電子レンジと申します

幡多 純

(湘南台川柳会)

眼を見れば喜怒哀楽が読める老い  
日々の家事でこずりロボに助け船  
禁煙のあの手この手も使い果て  
八ゼロ二ゼロ手入れ自慢の歯がキラリ  
路線バス間引き空白過疎地なみ

春 水

(辻堂川柳会)

改札を探しウロウロ無人駅  
ログインの度に大声二階から  
出来た筈いつ迄やつても出来やせぬ  
お若いと言ってかわせば不戦勝  
子供らの笑いが満ちて鍋は空

深野　いく生

(なぎさ川柳会)

同じ話また繰返す老い二人  
もつたいない断捨離止めてまた戻す  
手術済み明日は歩けと医者言う  
リハビリの一步一步が明日を呼ぶ  
まだゆかぬお呼びが来たら断わろう

船越　しのぶ

(湘南台川柳会)

誕生日忘れるほどに年重ね  
不意の客ぬか床匂う手で迎え  
トリセツは何を撮るのと孫に聞く  
にわか雨熱気さめずに霏<sup>もや</sup>が立つ  
庭ごしのとりの桜ひとり宴

古木　光江

(鶴沼川柳同好会)

若者がメールで辞表出社せず  
子にスマホ自分の時間作るママ  
視力落ち手こずる針目糸通し  
道の駅両手いっぱい旬を買う  
喧嘩して品数減らす晩御飯

紅　花　娘

(六会川柳会)

永田町心折れるは庶民だけ  
駅へ行く紫陽花の道梅雨もよし  
CO2減らす生活指切りを  
本気より無心で打つよホールイン  
中秋の風さわやかで身も軽く

ま　い　こ

(辻堂川柳会)

限界と袋が悲鳴詰め放題  
やり直しカード戻らぬ4回目  
気が付けば期限すぎてるサービス券  
あれかこれ鏡のぞいて初デート  
恋の花伝言板に咲く昭和

松　江　文

(湘南台川柳会)

風呂入りたまには足を伸ばしたい  
がんばれと我が身をさする腰と肩  
新豆を焚いて笑顔で腕囲む  
ドア開けて廊下トイレはサウナ風呂  
ガウン着て卒業出来た夢叶う

増　田　ち　か

(湘南台川柳会)

子が巣立ち夫婦の仲が試される  
春夏の区切り分からぬ温暖化  
自転車に主軸を移す家事情  
気配りが出来る大人になった孫  
手を振って近くに來たら人違い

マ　リ

(六会川柳会)

ルビないと読めぬ名前で師が困る  
おいしいね何でも噛める歯に感謝  
單身をLINEがつなぐ家族愛  
巣立つ子を駅で見送る泣き笑い  
預金なし金利の話縁がない

水城 茂子

(六会川柳会)

鏡みて顔の健康チェックする  
ゴールして笑顔にキラリ玉の汗  
テレビ前クイズに答え独り言  
老眼のメガネで足りず虫めがね  
世界中異常気象でちよつと変

み ゆ き

(六会川柳会)

ニュース見て美味しい話ないと知る  
おいしいを分かち合えればさらに美味  
記念日を忘れたふりで通過する  
身近でも内戦起こる家庭内  
星見上げ平穩無事の世を思う

守 田 貴美子

(六会川柳会)

空腹というわけではなく口さみし  
土砂降りの中で耐えてる花一輪  
生きてますかあの日別れて半世紀  
恋なんてしたことのない顔で聞く  
青空にまあるい月のある不思議

八 幡 禮 子

(こぶしの会)

子を諭す父母の心は無量大  
意気合った友の笑顔に腰を上げ  
思いやる距離を保って仲が良い  
連れ糸ほどき笑顔の母と居る  
一呼吸置いて火種を消しておく

村 田 和 彦

(湘南台川柳会)

雨の日はドレミドレミのトタン屋根  
投げた石ぶつかったのが今の妻  
ア行から探し始める友の名を  
電子キー閉っているか廻すノブ  
猥雑が溶け込む街に憩いの場

村 田 憲 治

目の前を秋が横切る赤とんぼ  
笛太鼓何年振りか秋祭り  
あの酷暑時が過ぎれば懐かしく  
酷暑過ぎ秋通り過ぎ寒い朝  
ワクチンが有料になり接種せず

悠 々

(辻堂川柳会)

改札口残る思い出切符切り  
心構え入力前のメモ探し  
ガラ空きの棚が待つのは黄金の穂  
空き家街角に庭草のびる主思う  
おっ早い嬉しお通し有料か

吉 田 節 子

(六会川柳会)

書き込んだ伝言板がなつかしい  
私が国を憂えて笑われる  
宇宙行く衛星ゴミをばらまいて  
子守うた母がその中眠くなる  
老眼鏡ふえてひとつは首にかけ

吉野 健 司

渡辺 次郎

(湘南台川柳会)

(湘南台川柳会)

背中押す物は試しという呪文  
行列のずっと最後にいる無念  
ドロ沼にあるもレンコン先は見え  
暑すぎて食べるも寝るもひと仕事  
寝てる間に来て去る雨の思いやり

狭いけど庭つき戸建夢かなう  
いたわりも時には負担だつてある  
老いを知る二時間ドラマ蚊帳の外  
苦勞せず生きる人生これもあり  
あと五分布団に居たい冬の朝

玲 和

(辻堂川柳会)

心配するな空き家セコムのプレートが  
新米新米と騒ぐなシンマイ洪い顔  
サービスするよオットどっこいその手には  
カタツムリ勝手気ままなワンルーム  
常識さ！内緒ごとにはチャックなし

### 第三十七回 ふじさわ川柳大会記録

日 時 二〇二四年 九月二十九日(日)  
主 催 ふじさわ川柳大会実行委員会  
共 催 (公財)藤沢市みらい創造財団  
後 援 藤沢市・藤沢市教育委員会  
会 場 藤沢市民会館 第一展示集会ホール  
参加者数 八十一名

宿題 「駅」 白鳥 象堂 選

#### 五 客

急行が駆け抜けてゆく最寄駅  
迷宮の裏に導くターミナル  
道の駅両手いっぱい匂をかう  
駅ソバがホームのベルにせかされる  
能登の復興終着駅は未だ見えず  
昌 代

#### 三 才

人 哀愁も希望も乗せる風の駅  
道 子  
地 廃線の駅に彼岸花が揺れる  
あやめ  
天(市長賞)  
降り立てば街の暮らしが香る駅  
みちお  
軸 平和とは結びつかない駅の鳩

宿 題 「駅」 白鳥 象堂 選

「手こずる」 池上 幸子 選

「あからさま」 外澤とくろう 選

「爽やか」 芦田 鈴美 選

特別課題 「キラリ」 竹花 敏夫 謝選

表 彰 市長賞 宿題の天の句 四句

宿題 「手こずる」 池上 幸子 選

五 客

片付ける老の手重く堀の家  
 はかどらぬ人知及ばぬデブリ処理  
 根回しのいの一番に分からず屋  
 生意気な昔の僕のような部下  
 半熟の卵の殻が剥がれない

三 才

人

世の中のすべてのものが開けづらい

地

そのままの君がいいよが命とり

天 (市長賞)

人の世を翻弄させる大自然

軸

助けられ老々介護ゆつたりと

宿題 「あからさま」 外澤とくろう 選

五 客

名を揚げて私の過去が晒される  
 キックバック受け取るための助成金  
 眼を見れば喜怒哀楽が読める老い  
 頼み事あからさまには言えぬ訳  
 ありのまゝ報告してはダメですか

三 才

人

横丁でいの一歩にさんま焼く

地

この星の不機嫌あらわ暴風雨

天 (市長賞)

子の前で俺の失敗話す妻

軸

この人が好きだと顔が言っている

宿題 「爽やか」 芦田 鈴美 選

五 客

わだかまり解けて九月の青い空  
 いわし雲秋を演出して遊ぶ  
 湘南の風にシラスの天日干し  
 少年の口調ハッカの香りする  
 伝説となる禪譲の鮮かさ

三 才

人

コカコーラでした私の青春は

地

青みかん揺らして渡る秋の風

天 (市長賞)

自己ベスト出して見上げるパリの空

軸

熱波さらりとスクランブルは秋の色

特別課題 「キラリ」 竹花 敏夫 謝選

五 客

少年の眼キラリと夢語る  
 独裁者底なし沼の目が光る  
 原石のきらり十代アスリート  
 全身が発光してる翔タイム  
 カラットの反射に女拉致される

三 才

人

子に潜む見えぬ才能掘り当てる

地

斎藤知事のなみだ野心がキラリ

天

無罪判決涙で光る姉の頬

軸

初舞台選句に躍る目がキラリ



俳  
句

青木敏行

(森の座)

ゆつたりと鷺の飛立つ稲田かな  
地球裏の戦火の匂ふ蟬の穴  
大鼓の一打一打や月渡る  
鉢揚げ老いし売子や鬼灯市  
荒強風や灰色重き護衛艦

阿部政子

平癒して真つ先畑へ花はこべ  
竹筒の手水は細し花は葉に  
取りたての野菜不揃ひ魂棚に  
球児等よ八十路も校歌うたふ夏  
墨の香の一句したため涼新た

安保淳子

(天為湘南)

水面に映りて揺るる菖蒲かな  
雨宿りの軒先に揺る吊忍  
昼飯の後の大の字三尺寝  
蛸や酒屋の閉店貼り紙す  
同窓の旅の要は河豚づくし

あや子

(みちくさ)

菊人形逢瀬の舞台御覧あれ  
秋の声被曝者世界平和賞  
軒並みや柿鈴なりの故郷よ  
寺の鐘響く我街秋の暮  
行く秋や幼馴染の逝く知らせ

生田 暁美

(はまべ)

ワンピース風吹きぬけて薄暑かな  
頼朝のながめし池や通し鴨  
静けさや啄木鳥森を耕せり  
満月に差し出す指やドビュッシー  
少年のけん玉の音冬の空

池野 隆

(天為湘南)

棟梁の杉の香纏ひ初仕事  
黒潮の寄する島島フェリー往く  
大空を星に譲りて去ぬ燕  
食卓に小さき地球儀春の夢  
病室の碁盤に注ぐ花明かり

石崎 玄舟

(一輩)

春風や赤べこの頭の揺れ止まず  
残る蚊につきまはさるる古刹かな  
木犀や退院の母髪を梳く  
秋祭り社務の爺の茶碗酒  
車座の自慢話や敬老日

石塚 佑伎子

八十路越え心たおやかシャボン玉  
暮れる秋町の灯一つ二つかな  
道の辺の小径狭める照紅葉  
落葉松や落暉残して鳥渡る  
一居の襖のぞくや風坊主

伊藤 梢

今井 美恵子

(波)

寒夕焼眺めるばかり遠き地震  
さくらさくらよもう少しこの世に  
水琴窟の星の響きや竹の秋  
誘惑の蛍袋の白い闇  
冬銀河まで街角のサキソホン

伊藤 美也子

(波)

恵方とは吾が行く道や雨上る  
鬼は外歳とることも悪くない  
本当は嫌ひじやないのヒアシンス  
春惜しみ命惜しみて暮るるなり  
秋櫻すでに暮色の中にあり

居山 勝

(天為湘南)

初蝶や空振二回猫パンチ  
警策や蕾はぐるる蓮の朝  
もろ手あげ風になりきる大花野  
秋ともし節穴丸き柚の小屋  
初明り社の龍の舞ふ構へ

岩谷明子

うさお

(冬すみれ)

春夕焼ころの隅に燃え残る  
鶯草は小さき貴婦人風を聴く  
法師蟬鳴けば夕風背中から  
屋根たたく霰や夜のカンパネラ  
過ぎし日へ汽笛の流る冬の海

植田裕子

占部美土子

(鶴沼かほちゃ)

鼻かむを笑ふ幼子冬うらら  
春の昼抱く児ふはりと寝入りたり  
幼よりつなぐ吾の手秋日和  
かくれんぼう君の笑顔に木の実降る  
初しぐれひとつの傘で児と駆ける

(はまぐ)

若竹やすくつと父の背丈超ゆ  
黒髪を手櫛でたばね夏神楽  
星月夜産声ひびき娘は母に  
金秋や加賀友禅の筆さばき  
妖精でゐてくださいね六花

江口文子

大久保啓子

(天為湘南)

植木屋の手さばき眩し松飾  
春雪の囲碁打つ指の白さかな  
夏帽子地元巡りの旅気分  
母の忌を忘れかけたり茗荷の子  
ウオーキング男の日傘板につき

(たけのこ)

春帽子歩けることに感謝して  
窓開けて落花を両の手に受くる  
ふらここの揺れに心の揺れなだめ  
秋暑し意地悪婆になつてやろ  
身に入むや写真の夫は笑むばかり

大木保幸

大山賢太

(みちくさ・かわせみ・かるがも)

田起こしや 目覚めと見えし 黒き土  
ひと片に 解けて流る 花筏  
杖ならぬ パークゴルフや 風青し  
ビルの谷 音が人呼ぶ 秋祭り  
竹春の 眩い巡路に 親子ゆく

虹目高青い尾鰭で泳ぎけり  
百日紅滑り尻餅茶虎猫  
朝の日に薄紅揺れる秋桜  
山の端に淋しく咲けり吾亦紅  
枯蟪蛄追われ追われてデイサーピス

岡本 泉

(鷹)

バスを待つ足踏小さき余寒かな  
白萩や着ることもなき母のもの  
一遍忌人のうしろを寛<sup>くろ</sup>ぎて  
夜に入りてスーパ―混みし残暑かな  
海岸の奇岩の列や日の盛

加藤 静子

(はこべ)

落味噲のひと品あれば足る昼餉  
ざんなんが隠れてゐたり空也蒸し  
染めつけの鉢にゆらゆら冷奴  
夏大根信州そばの香りかな  
湯豆腐や身辺整理の話など

金井 詩子

(波)

筆始め龍より墨の匂ひけり  
一羽来て二羽翔つ浮標<sup>フイ</sup>の冬かもめ  
打ち寄する波も一品夏料理  
色変へぬ松や昭和の分教場  
老脚の一步の遠き冬の駅

金 栗 トモ子

(サンシャイン)

二人静同性婚という形  
戦争や葉裏に隠る毛虫焼く  
流星の余白一丁目一番地  
黒揚羽標本という磔刑  
感動は小さくなりてちゃんちゃんこ

金 子 真悠美

(天為湘南)

足場取れ新築戸建に春日入る  
惜春やいつしか古希のクラス会  
白靴やテーパークを自由自在  
友を待つ改札口や星祭  
髪結ひて襟足涼し宵の星

加野 庸子

(一葦)

おもむろに膝折る象や凍ゆるむ  
促され膝すすめけり雛の間  
しぐれ詠む心敬の碑も花のころ  
阿夫利嶺の風に首振る葱坊主  
星涼し鈍色に浮く潜水艦

金 田 美 保

(かるかも)

喜寿の秋鏡の中に母の顔  
おなじかな孫と見る月アイパッド  
十五夜になにを願うの吾子二人  
敬老の手伝いをして恩送り  
七五三曾祖母の晴着ひ孫まで

神 谷 章 夫

(さくら)

逃げ水の逃げ損なひは蟹になる  
本当は立ち疲れたる葱坊主  
自然薯に癖なきもののなかりけり  
水の辺の数珠玉に指とどかざる  
釣糸の愁思のさまに放たるる

亀倉 美知子

梅ふむ佳きこと一つもうひとつ  
下闇の奥社果てなき苔の磴  
秋風や父母なき郷の沈下橋  
ひよどりの声音夕日を染めにけり  
初声や笈の水のいと眩し

川口 和子

(天為湘南)  
花冷や楸紗に残るたたみ皺  
青き踏む庚申塚に父祖の銘  
見はるかす大庭御厨山若葉  
牡丹咲く真紅の頁開きつつ  
木簡の墨跡薄し雁の棹

河村 笑

(鷹)  
開港の頃の絵ガラス晩夏光  
読経の声の怯まずはたた神  
実むらさき本気の色となりけり  
升<sup>のぼ</sup>さんの驚きさうな大糸瓜  
ゐのこづち取り合ふ間にも山暮るる

河村 青灯

(鷹)  
火を囲むひとの性なり飾焚く  
鱖散る老朽船の始動音  
パーティーの歌声去りて水芭蕉  
はらばへば秋の砂山温きかな  
悴める手を包みたるおほきな手

草柳 節子

(天為湘南)  
久びさに杖を友とし青き踏む  
小春日やG線上のアリア聞く  
花の下野球する子の声響き  
稲妻の地をつき刺すを眺めをり  
万緑やモツシーシの子十八才

小林 律子

(天為湘南)  
初釜や主客華やぎ湯の滾り  
糸つむぐ吉祥模様の手毬かな  
雀らの音譜の如く秋の朝  
十三夜過ぎゆく時の早さかな  
雪の舞ふ闇夜に浮かぶ金閣寺

小林 美知子

(天為湘南)  
夜の更けてこほろぎすだく山の宿  
野の花の碧き色濃き秋日影  
蟪蛄の死して今だに威嚇せり  
大樹より声の落ちくる秋の蟬  
昼下がりに草笛競ふ通学路

小堀 公美子

(鶴沼かほちゃ)  
父の梳く母の白髪福寿草  
採点の父の横顔春灯  
地めだかの卵見にゆく祖父の家  
くるぶしの木の瘤のごと遊行の忌  
山茶花よ老ゆるごと澄む母の眼よ

小松原 キイ子

(一華)

春炬燵付箋あまたの旅冊子  
カラフルに活けてひとりの薔薇の部屋  
万物の火照りの余韻百合匂ふ  
祈ること多き八月ちぎれ雲  
新盆や友の墓標のありがたう

小山 美穂

(みちくさ)

浮かれ猫ニャンプロしては戯れぬ  
蛇出でしミイアキャットがたたきおり  
猫の恋シャーチョンチョン猫二人  
雪しろの道を踏み踏み歩む道  
薄氷とつつき割りて輪をつくり

齊 藤 久美子

(天為湘南)

里山の一本道や秋の声  
山門を潜りし先や照紅葉  
木枯や屋台の主一人きり  
母の日の肩たたき券セピア色  
夏野菜ゴロッと入れて我が家流

齋 藤 まり江

(波)

よそゆきの顔の集まる初句会  
菜の花の香り溢れる吾妻山  
鬼灯市粋な売り子の豆絞り  
同じこと問うて答えて秋暑し  
落葉踏むふわりと沈む靴の底

齊 藤 義昭

(天為湘南)

涼風の吹きぬく土間の広さかな  
満月よ雲をはじきて輝けり  
おぼろげな記憶の中の草の笛  
あぜ道の百円均一春野菜  
柔らかな日差しと共に雛納

佐 藤 美津子

(天為湘南)

正月やビルの谷間の江戸巡り  
三姉妹米寿喜寿の雛まつり  
地の揺れて柵田の亀裂蓮華草  
大杉の樹齢千年蟬時雨  
名月や山合ひの宿酒一合

坂 本 キミヨ

(波)

坪畑は婆が遊び場花えんど  
放物線えがく投網や雲の峯  
焼酎に酔わせて柿の渋を抜く  
あかときを差し交う雲や冬に入る  
時雨るるや鳥を縁どる街路燈

篠 田 清秋

秋暑し保護犬里子迎え入れ  
冬立つや犬は地域をパトロール  
サンタから犬にケーキのプレゼント  
冬の浜江の島めぐし走る犬  
子も犬も青空の鯉ながめけり

島田昌子

清水 誠

(一葦)

貨物列車夏雲いくつ越え行くや  
井月の瓢箪軽し秋の風  
野晒しの角なき墓やそばの花  
網棚にリユックはみ出す豊の秋  
二才児の通訳七才鳳仙花

初夢はなお他人のため八十路越え  
難関を超えて学び舎桜咲く  
ともかくも耐えて忍んで炎暑かな  
吾ここに開いて薫る金木屋  
冬ざれや妻亡き友と趣味談義

清水和徳

四郎

(天為湘南)

数独やつり剥けたる衣被  
新藁を挟み渡さる中也の詩  
傾ぐ日と競ふがごとく晩稲刈る  
巻貝の殻十月の砂零す  
秋の声流れ着きたる空瓶に

幹裂けて神代桜迫りけり  
ぶつかりて汗が飛び散る大一番  
アロハにも似合ふ年ごろ似合ふ場所  
どき湯さと津軽の人や今朝の秋  
ゴンドラの眼下は秋のグラデーション

鈴木絹子

栖原 由美子

(冬すみれ)

五月雨や借りれば重き男傘  
立ち上がる入道雲の拳かな  
夏の蝶はがき一葉戻りくる  
古寺の笑う羅漢や散松葉  
どんぐりや遊ぶ幼のひとり言

(鷹)

秋澄めり露天にひさぐ打刃物  
山茶花や単線駅の時刻表  
夢十夜また読み返す春の風邪  
耕人のはたく袖口土匂ふ  
太鼓橋渡る神輿の氣勢かな

鈴木 千枝子

角 和富

(天為湘南)

夜業の灯掲げ火急の道普請  
台風過始発電車の長きベル  
鈴の音の風に乘りたり秋遍路  
国境をたやすく越ゆる草の絮  
こぼれ萩飯盛女の墓朽つる

市役所の横の日当たり帰り花  
フルートの音色にひらくアマリリス  
行秋や人それぞれの選挙かな  
あきらめの必となりし老いの秋  
五年ぶりプールに浮かび息を吸う



関 美 晴

高 久 弘 行

(波)

桔梗やむかし富山の葉売り  
柿日和声の通りのよき日かな  
金秋や雙十節の路地に旗  
どんぐりや幼き我を拾う森  
輪島塗拭えぬくもり雪しんしん

草 心

田 中 素 子

(天為湘南)

初耳の松虫の声闇透ける  
知らぬふり敬老の日の思いやり  
夏空やミント葉入れた白湯を持ち  
一斉にどくだみの花道白し  
災害の無い時はなし愛の羽根

父母<sup>ちちは</sup>も夫も見し海初日の出  
桜蕊降る橋のたもとに時流れ  
花にらの星ふるごとく咲く真昼  
傘寿なる今年の色の新松子  
冬の日や天目茶碗の黒びかり

手 塚 智 之

栃 尾 ま ほ

(みちくさ)

一人行く長野安曇野花野原  
匂い立つ七月の庭草むしり  
国旗立て気持ち新たに文化の日  
目深だがあれは妻だよ冬帽子  
節分会誰が鬼やら福は内

畑なきワイナリーにも秋深む  
花野道循環バスをひとり待つ  
木の葉飛ぶ人波の間をすり抜けて  
秋澄むや諸国行脚の一遍さん  
遊行寺の山門しぐれ古道めく

常 盤 貴美子

富 田 誠 子

(冬すみれ)

行方問う声冬ざれの震災の町  
山路過ぐ風も八十八夜の香  
昼顔や砂の文字消す波の音  
オルガンの静かな祈り初時雨  
火の匂う鯛焼の餡ほくほくと

風鈴や郷愁さそふ軒の風  
ちぎれちぎれの郷愁浮かぶ秋の雲  
黄葉散りて庭に生まれししづ心  
八十路越え感謝の心虫の声  
島渡るあかねの空の色の中

内藤 繁

(天為湘南)

初富士や一市に五基の芭蕉句碑  
蝶舞ふや旧街道の宿場町  
義経の首流れ来て藤の花  
木槿咲く乗馬クラブに馬術部に  
名月や弁天奏する波の音

永井 かほる

(波)

切株に座すや冬日の只中に  
落茹でし湯気に昭和の香りして  
筍飯嫁の塩梅かみしむる  
生家なる日の燦燦と梅を干す  
鉄線花夫の木椅子の空きしまま

永塚 享司

野分来るスマホに避難指示の文字  
櫟葉の黄ばみて何れ散らんとす  
窓開ければ金木犀の香が鼻に  
帯解きの吾子ほんのりと口に紅  
炬燵出す出さないで一悶着に

中根 美保

(一華)

園児らに手を振り返し冬うらら  
海市消ゆ隠し扉のあるごとく  
新涼や粘土にしるき子の手形  
羊歯くぐる水音秋のこゑとなる  
窓大きチヨーク工場小鳥来る

西野 洋司

(つぐみ)

恋の猫井戸に墜ちしは過ちか  
寒晴や光輝く屋根瓦  
鎌倉も此処古き谷戸笹鳴ける  
四月馬鹿真逆背骨が折れるとは  
ホーホケキヨ朝寝染しむ妻なるぞ

能勢 マサ子

(天為湘南)

夕景の水田飛び交う夏燕  
宅配便友の顔似のトマト着く  
夕闇の水田乱舞の蛍狩り  
里芋の皮むく祖母の手の黒さ  
隠れ鬼芽を掻き分け秘密基地

原田 稔

石楠花や庭を飾りて天仰ぐ  
五月晴れ自転車乗れて孫破顔  
相模川流れゆつたり芒かな  
秋の田にポンと佇む三県境  
扇子持迫力溢るねぶたかな

平岡 法子

(冬すみれ)

向かひ風落葉舞ひくる散歩道  
てふてふが後先に舞ふ昼下がり  
緑陰をひと区切りとし歩むなり  
百日紅咲きまた咲きて賑やかに  
終戦忌世界平和を希求する

廣 崎 龍 哉

(二葦)

初富士に一朵の雲も無かりけり  
新聞を斜め読みして啄木忌  
尺取虫の枝先にきて枝となる  
京洛の闇に浮かべる大文字  
花八つ手元素記号の如くにて

福 田 善 吉

(冬すみれ)

江ノ電とカヌー並走日焼け浜  
水平線沸き立つ雲や夏の果て  
弥陀仏の裾の木目や秋の風  
箱根路や老舗旅館のとろろ飯  
秋の虹明日はいいことありそう

藤 森 巴 芹

(天為湘南)

屋上にゴジラが潜む朧かな  
新松子空家の続く三丁目  
脱走の癖ある猫や夕月夜  
散歩する幼の手には小判草  
色街の尾曲猫や後の雛

船 旅 遥

(天為湘南)

能面の妖しきまなざし秋の月  
ちちろ鳴く白き句帳に乾く筆  
遠き日の母のささくれ林檎の香  
薄氷を透かして見ゆる歪みの世  
車駆る五月の風を運ぶため

堀 口 みゆき

(鷹)

花の雨クリアファイルを濡らしけり  
着信音大噴水の綺羅の下  
午報鳴る楡の葉蔭のハンモック  
境内の響く太鼓や蟻の列  
かなかながかなを呼ぶ櫛に

馬 来 まち子

菜園の主のごとく葱坊主  
星空をかき混ぜてをり今年竹  
揺り椅子に本伏せてあり敬老日  
とびの輪のだんだん高く新松子  
長鳴きの牛の涎や秋深む

見 上 都

(鷹)

杉菜萌ゆ本家の嫁がトラクター  
亀鳴くや道綱の母名を残し  
寝静まる葉桜の町旗日かな  
花虻や切り株あらばひと休み  
玲瓏と富士に朝日や青楓

宮 川 敏 江

(波)

伊那にひと伊那に酒あり井月忌  
随分と昔の話なんぢやもんぢや  
薄墨の便り投函半夏生  
煤の梁太し柚味噌の川魚  
このみちはみんな行くみち白秋忌

宮 永 武 彦

(サンシャイン・はまべ)

さよなら履歴書ボンボンダリア咲く  
よく来たね頬いっぱい柿を剥く  
たまごサンドのたまごたっぷり冬に入る  
コロッケや母の心の形して  
入りてなお空深く染め秋の日は

村 木 勢 子

伊豆七島五島の見ゆる吊し雛  
指圧師の痛気持いい万愚節  
漏電なしで終る点検秋晴るる  
書き上がる道路白線秋澄める  
朝の水和紙の淡さの冬さうび

森 本 明 美

声弾む昔乙女の歌留多会  
寺詣寒九の水に清められ  
母の雛その又母の雛飾る  
客を呼ぶ島の店先アロハシャツ  
朝顔の寄辺なき蔓風のまま

柳 生 恵 子

(天為湘南)

相輪へ鳶の一差し実朝忌  
荒畑に一枝蠟梅人寄せり  
母衣背負ふ関の声秘む熊谷草  
花田植眼の定まらぬ飾り牛  
闇夜にも砧打つ音のいよよ澄み

村 松 麻由美

(湘南アカデミア)

秋つばめ空つばの巣に風が吹く  
A線のバイオリンの音秋澄めり  
虫の音や独りページをめくる夜  
新涼や開けし窓よりピアノの音  
秋の海もの想う人ちらほらと

森 田 順 子

雲うすく凍て月の上を流れゆく  
春一番新しき帽おさえつつ  
留守番の娘に残しおく桜餅  
爽やかや伊豆大島も江の島も  
退院や十葉の花目にやさし

柳 井 仁

(慶応義塾湘南藤沢高等部)

空蟬や地藏の笠に爪たてり  
墨汁をぶちまけたごとと蝌蚪の群れ  
単線の一人旅なりソーダ水  
秋高し足場組む音遙かなり  
風車タタタタタと客を呼ぶ

山 口 愛 子

(サンシャイン)

麦秋のジャズの流れてパン焼けて  
仏壇の三つの位牌雁渡し  
近道は坂道スニーカーは白  
独り居のつくづくひとり夜の長き  
芒原行けるとこまでこの杖で

山下 巖

引き潮や想ひ出攫ふ夕月夜  
秋ぐもり想ひ出だけに続く小径  
逃げ水や冥界からのメッセーじ  
さしのべる手は闇つかむ青葉木菟  
村娘祭りの夜の化粧水

山下 遊児

さえずりを翻訳すれば相聞歌  
たまらんわ息をするのに汗かいて  
月今宵よき湯よき酒よき女房  
恋をせんポインセチアの赤ほどに  
湯豆腐が肩を揺らして唄い出す

山田 節子

花吹雪光る礫となりて舞ふ  
香りのせ走り茶の針ほどけゆく  
今年竹高く高くと青空に  
爽涼や神木の幣新しく  
白詰草ノートに挿む佳き思ひ

山田 貴世

風吹けば風にじゃれおりねこじやし  
この道は好きな道なり草の花  
花蘇鉄時宗遊行寺総本山  
掃きしあと散りし紅葉はそのままに  
虫すだく一叢の草抜かでおく

吉田 和子

菜の花やしみじみ齡思う日々  
せせらぎの闇深くして螢の火  
海よりの風心地良し庭花火  
面影を重ね旧知の賀状読む  
白と言う無垢なるキルト冬日向

凌

人形を抱けば おびただしき 桜  
いつのよのはなもりならむ うしろむき  
着流しで来よ あかつき 花に乗って来よ  
今生も 後生もはなびら 微熱せむ  
一点鐘 二点鐘かな はなふぶき

吉田 半夏生

鬼の子やスマホ抱える人嫌い  
芋の露無事を折りて健診日  
細々に踏まれし紅葉九十九折  
神送夕陽が神に路つくる  
香水のスクランブルする渋谷かな

渡部 有紀子

一斉に紙裏返り大試験  
コミックと中公新書春炬燵  
一木を彫つてみほとけ山笑ふ  
歪みつつ出でてまん丸石罅玉  
口中を転がる飴や涅槃西風

## 第一三〇回市民俳句春の大会

令和六年四月二十八日、藤沢市民会館第一  
展示集会ホールにて開催。

応募者一二四名、当日の参加は一二一名。

講演 伊藤伊那男氏（「銀漢」主宰）

―井上井月とその時代―

### 入賞作品

#### 〇市長賞

古市 シゲ子  
うららかや川の底まで日がさして

#### 〇市議会議長賞

佐藤 享子  
折鶴のどこもとがりて春の風邪

#### 〇教育委員会賞

松坂 真理子  
全身で春へ漕ぎ出す三輪車

#### 〇俳句協会長賞

山田 せつ子  
花筏たぶんとかばの背に回る

#### 〇協会賞（以下同）

中根 美保  
海市消ゆ隠し扉のあるごとく

畑 昌子  
をんどりの蹴爪の光る春の土

山下 遊児  
あるだけの風を集めて初蝶来

伊藤 美也子  
分度器に記す名前や進級す

寺田 篤弘  
肩の花たがひに払ひ別れけり

山田 貴世  
ふらここや夜は風の子に明け渡し

川路 ゆさ  
いつせいに鶏冠動く春の雷

矢口 美都子  
ふるさとへ渡る鉄橋鳥雲に

佐野 恋蔵  
ものの芽の雨ならば雨仰ぎをり

岩谷 明子  
紙で切る指一瞬の余寒かな

鈴木 絹子  
茎立や大目に見ればまだ青春

濱田 聡子  
故郷の春はここから路の臺

清水 和徳  
へぎ蕎麦を打つや越後に春の来て

水沼 富子  
田起こしや土黒ぐろと水を打つ

上川 謙市  
芽吹きつつ櫛伐られてしまひけり

神谷 章夫  
初蝶のやうにひかりの海に出づ

宮澤 進  
踏青や口数戻る試歩の妻

戸恒 東人  
人麻呂も赤人もゐる春野かな

渡部 喬  
妻すでに海市の中の客となる

千葉 民子  
のどけしや鮎む牛のよだれ地に

福田 善吉  
手を握るだけの面会花曇

常磐 喜美子  
永き日や地球儀ゆるり回し居り

前田 弘子  
立ち上がれ踏ん張れややこ草萌ゆる

大平 雅芳  
ふらここを小さく漕いで返書読む

原山 テイ子  
うららかや百歳めざし布を裁つ

鹿野島 孝二  
暖かし島に医師来る月曜日

西室 登  
卯波寄す白線長し相模灘

霧野 萬地郎  
母子草忘れる過去と残る過去

## 第四十九回一遍上人忌俳句大会

令和六年九月十六日、時宗総本山・藤沢山清  
浄光寺（遊行寺）大書院にて開催。

参加者七十八名、事前応募句による参加は  
一三四名。

講演 岩田由美氏 「秀」同人・「青麗」会員

― 田中裕明の俳句、その魅力 ―

### 応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 鈴木 千砂

どの向きの風も厭はず猫じやらし

○青木賞 中根 美保

新涼や粘土にしるき子の手形

○北澤賞 湯澤 誠幸

遊行忌の月に明るき膝頭

○市長賞 常盤 貴美子

大向日葵枯れて重さの残りけり

○協会長賞 廣崎 龍哉

行く雲も流るる水も一遍忌

○協会賞（以下同） 太田 うさぎ

蝸に漂白されて今日終る

上川 謙市

遊行忌のこの青空へ吸はれゆく

松坂 真理子

秋澄めり水を四角に和紙の里

中村 みき子

間引き菜の土塊しかと一遍忌

大坪 正美

足跡はみな捨ててゆく一遍忌

小松原 キイ子

故郷は変はらぬ匂ひ星月夜

智久 薫子

遊行忌の草満ち満ちて吹かれをり

点描となりつつ風の吾亦紅 山下遊児

生家なる日の燦燦と梅を干す 永井かほる

天牛をさいと鳴かせて野にかへし 小堀公美子

加野哲朗

秋の聲 遊行寺坂で立ち止まる

しんがりはをどる比丘尼や一遍忌 沖石讃岐

堀口みゆき

富山ゆたか

宮沢久子

野木桃花

この影はステゴサウルス夏木立

遊行忌の下がりつつ掃く箒かな 土屋幸代

小さき手に寺の束子や墓参 堀口知子

#### 当日句の部 入賞作品

##### ○遊行寺賞

秋の聲聞く一遍の前かがみ 田口風子

##### ○青木賞

羊歯くぐる水音秋のこゑとなる 中根美保

##### ○北澤賞

秋声や日限地蔵の大き耳 今井美恵子

##### ○市長賞

秋声や坂に小さな水たまり 北本佳子

##### ○協会長賞

どの窓を開けて聴かうか秋の声 堀口みゆき

#### ○協会賞（以下同）

秋の聲 擦れあふ鯉の傷つかず 太田うさぎ

秋の聲 聞かむと水面見つめをり 西野洋司

手を入れてみる新涼の手水鉢 野木桃花

秋の聲 流れ着きたる空瓶に 清水和徳

傘の寄り傘の離るる秋の窓 夏野猫宙

遊行寺のどこ歩いても秋のこゑ 加藤いろは

風咬みの竹林を梳く秋のこゑ 川路ゆさ

僧走る秋の驟雨となりにけり 田口茉於

秋の聲 遊行寺坂で立ち止まる 高村七子

秋声や雨傘細く巻きて去り 高橋純子

寺と家と混みあふ坂や渡り鳥 上野犀行

一遍忌横降りにまた糠雨に 山西雅子

渡り廊下かすかに軋む秋の聲 酒向昭

秋蝶過ぐ渡り廊下に人待てば 橋爪きひえ

遊行寺の大屋根越えて秋の聲 高瀬俊次

古き墓に塔婆わづかや秋の聲 前田恵美

目を細むひざり地蔵や秋のこゑ 畑昌子

開山忌了へし伽藍に秋の聲 鹿野島孝二



## 第二三一回市民俳句秋の大会

令和六年十月十四日、藤沢市民会館第一展示  
集会ホールにて開催。

応募者一二九名、当日の参加は一一三名。

講演 堀田季何氏（「楽園」主宰）

―地球俳句―

### 入賞作品

○市長賞 鈴木 絹子

蓑虫や一人が好きなまま老いぬ

○特別賞 高野 尚志

鰯釣の夕日まみれとなりにつけり

○特別賞 山田 貴世

この道は好きな道なり草の花

○市議会議長賞 畑 昌子

持ち替へる傘の重さや終戦日

### ○教育委員会賞

子鼠の飛び出す絵本秋ともし

### ○俳句協会長賞

星祭キルトを綴る糸と針

### ○協会賞（以下同）

丹波栗兄の大きな字で届く

山 下 遊 児  
かなかなの日を畳むかに鳴きにけり  
居 山 勝

星降りて点す千基の絵灯籠

蒲 谷 トシ子

ふるさとの秋の抽斗あけてみる

篠 原 広 子

秋薔薇人待つ椅子に浅く座し

中 根 美 保

吊橋を落とすごとくに葛を刈る

永 井 かほる

大根の畝のふかぶか農継げり

霧 野 萬地郎

手びねりの皿に落ち着く零余子かな

齋 藤 まり江

同じこと問うて答えて秋暑し

村 上 和 子

水引や風呼び風に紅こぼし

吉 本 史 子

蚯蚓鳴く地震に怯ゆる秋津島

前 田 恵 美

衰へて川に流るる秋日かな

川 路 ゆ さ

携帯にひぐらしの声吽のこゑ

森 本 明 美

思い出は夜長の母の鼻めがね

鈴 木 千枝子

銀漢の零れ落ちたり九合目

大久保 啓 子

芒野へ迷子の私さがし行く

小松原 キイ子

小 堀 公美子

古 市 シゲ子

山 下 遊 児

居 山 勝

蒲 谷 トシ子

篠 原 広 子

中 根 美 保

永 井 かほる

沢 田 敦 子

兄ともつと話したかつたつづれさせ

山 田 せつ子

刃を当てて西瓜思はぬ方へ罅

伊 藤 美也子

筒茶碗二つ伏せ置く秋暑かな

佐 藤 亨 子

手を握るだけの見舞や桐一葉

高 瀬 俊 次

盛り場の路地にかそけき昼の虫

川 畑 薫

夫の眼鏡掛ければ夫の秋思かな

前 田 弘 子

一間づつ月の暈となりゆける

# 五行歌

秋 山 昭 子

（藤沢日曜歌会）

立秋・・・はて？  
残暑・・・はて？  
どこか片隅に  
追いやられた  
季節のことは

浅 野 征 子

（藤沢火曜歌会）

八十路をこえれば  
「齢」考えない  
時には実年齢で  
時には見た目年齢で  
自然体で生いけたらいいね

新 井 奈々草

（藤沢日曜歌会）

線状降水帯が  
こんなに降らせたら  
雨乞いの神様  
立場がない と  
嘆く

飯 田 敏 一

（藤沢火曜歌会）

世の安寧を祈つての  
神社の例大祭  
祭り囃子が町中に響く  
紅白の彼岸花  
一緒になつて寿ぐ

石川 トシ

(藤沢日曜歌会)

「こんな筈じゃなかった」  
が

部屋中に  
ぼろぼろ落ちてるから  
足元注意ね

石松 いさを

(藤沢日曜歌会)

十月に咲く朝顔は  
気温の変化に  
苦勞をしている  
花の大きさが変わり  
色までも変えている

いわき やすお

(藤沢火曜歌会)

フライパンは  
毎日使うと錆びない  
人の心も同じ  
日々感動を持つと  
錆びないかも

牛島 芳一

(藤沢火曜歌会)

蝶の道を  
迷い無く  
舞い抜ける  
クロアゲハ  
はて?! 私は…

遠藤 由里

(藤沢日曜歌会)

昨日 TVに出た  
近所のパン屋さん  
今日は朝から  
大行列  
メディアの力、こわさ

緒方 真子

(藤沢日曜歌会)

「カノン」を奏でるオルゴール  
終わりが近づくと  
テンポと音量がゆるむ  
それで良い  
私の日々もゆるみがち

岡本 まさ子

(藤沢日曜歌会)

水であり  
川であること  
思い出したか  
ふいに  
堰を超える音

小原 美子

(藤沢日曜歌会)

一生に一度の  
紅をつけて  
芙蓉の花  
母の旅立つ  
くちびるのいろ

菊地敬子

(藤沢火曜歌会)

黒豆 金平 昆布巻  
つましい手作りお節  
病後ゆえ酒はなし  
二人向い合ってるのが  
最高のお節

志津

(藤沢日曜歌会)

七夕に飾る  
竹のように  
重い願いを  
背負っても  
しなやかでいたい

黒木 允

(藤沢日曜歌会)

老いば老いる  
ほどこに「心」  
軽やかに登れる  
五行詩歌という  
楽しい山には

柴田成子

(藤沢日曜歌会)

満ちては欠け  
欠けては満ちる  
律儀なお月さん  
秋は殊更ことさらに  
べっぴんさん

鈴木春野

(藤沢火曜歌会)

無理しないでが多い昨今  
娘からお母さんなら  
出来るから頑張つて  
と肩押され  
やる気芽生える

高原伸夫

(藤沢日曜歌会)

大地が生み出す希望  
木々や草花  
穀物に野菜が  
人間の暮らしを  
豊かにしてくれる

草 庵

(藤沢日曜歌会)

不思議だなー  
五十年前旅先で  
出逢った娘と  
今日も二人で  
昼寝する

高原 美智子

(藤沢日曜歌会)

柔らかくなった  
日差しに  
心から寛ぐ  
秋という季節に  
感謝しながら

田 中 き み

(藤沢火曜歌会)

細身の秋刀魚さん  
いただきますーす  
さっぱりとしたお味  
太目の私には  
ちょうどいいかも

寺 田 篤 弘

(藤沢日曜歌会)

なんとかなるよ  
なるようになるよ  
みんなそうだよ  
それでいい  
人間なもの

西 川 彩 子

流れてゆく白い雲と  
隣でねている娘の  
寝息だけが  
生きてるみたいな  
午後の2時

西 田 明 子

(藤沢火曜歌会)

老いてゆくと言う事は  
今の自分そのもの  
親のこんな時に  
チャンと解っていたら  
もつと孝行できていたかも

橋 本 圭 子

(藤沢日曜歌会)

出会えて  
良かった  
と  
思える  
人がいて  
しあわせ

松 岡 雅 子

(藤沢日曜歌会)

障がいある息子を  
グループホームに  
送り出した朝  
ブルーグレーの空  
広がる

細 谷 修 一

(藤沢火曜歌会)

「元気なさそう?」  
「絶好調!」  
「お味はどう?」  
「おいしい!」  
一日二回嘘をつく

松 本 希 雲

(藤沢日曜歌会)

支えて下さった  
方たちが次々と  
先に去って行かれる  
夕暮れに寂しさが  
老いを包む

茂木 知恵子

(藤沢日曜歌会)

わき道 寄り道 回り道  
道草をする

春は

花に誘われて

道 迷う

横山 礼子

(藤沢日曜歌会)

上野駅での  
地下鉄の乗り換えで  
オロオロ

久しぶりの東京は

あの頃の私？

山口 博子

(藤沢火曜歌会)

手こずった夏に

別れを告げることく

残りのアイス珈琲

ゴクリと飲み干す

待ちくたびれて 秋

# 現代詩



## スノードーム

硝子の向こうで浮遊する  
集団は見せかけで  
生きるリズムは個々に  
絡まったままの触手は  
そのままがいい  
その場の空気感  
瞬時によりとく能力  
もう動くことのない  
そのからだは  
真つ白な雪と同じく  
降り積もるならば  
かまくらをつくりたい  
丸みある命がふくらむ  
衝撃をあたえても  
割れることなく  
さらさら舞う  
楽しむ心は軽やかに  
過ぎ去る記憶は鮮やかに

おぐり あつこ

## 友よ

佐藤 裕一

友よ

君は 生き延びるために  
右腕を 付け根から切り落とした  
左腕一本の君の作品は  
並み入る健常者の作品よりも  
精妙で 力強かった

ああ！それなのに

神様は 何を考えていらつしやるのか  
働き盛りの 君の命を召し上げ  
七十を超えた 僕の方を生かし給うた

友よ

いつの日か 生まれ変わって  
君と再会できるのだろうけれど  
今はただ 向こうの世界での  
君の魂の平安をのみ祈ろう

## ある日

チズコ・W・クジラ

画廊のガラス越しに見える  
交差点の向こうで「よっ」と手を上げた  
君は 民族調の手織り服  
フリンジをゆらゆらさせて  
信号を渡って来る  
いつもの背広姿とは  
うって変わって別人のようヨ  
手を上げられても判らなかつたワ  
今日のファッションは スケッチブック等  
小脇にかかえ とても様になってるネ  
顔の髭も絵に なってるワヨ

もんべ姿の私をパッとスケッチ  
「どうぞ」とご満悦に  
手渡し、してくれたワネ  
私だけの宝もののダワ  
サンキュウー……!!

## 小さな思い出

中 出 隆 義

幼い頃の思い出は  
川原いっぱい乱舞する螢の灯<sup>ひ</sup>  
一番星二番星 やがて満天の星座と  
長い長い天の河  
小さな小さな無数の光に満ちていた

幼い頃の思い出は  
小川のドジョウ田圃のタニシ  
早朝でくわす鬼やんま  
木の蜜とりあうクワガタ・カブト  
小さな小さな友に溢れてた

幼い頃の思い出は  
泣いてこもった押入れの闇  
お寺に掛かる閻魔と地獄絵図  
町角に飾られた疱瘡団子  
知らない恐さに満ちていた

## 自分以外の誰かである理由

ひ ま わ り

## 辻堂新町の思い出

ヒラサワ タカシ

私は私

他の人とは違う私

だれかと一緒ではない私

誰かになる必要もない

誰かになる必要はない

だって 私は私

他の人ではない私だから

今から7年前 辻堂新町に住んだ

朝 散歩をする 老夫婦と すれ違った  
二人で 手を取りながら 毎日 歩いてた

すれ違いながら 目で追った  
毎日 毎日 通りを 南から 北へ 歩く  
毎日 毎日 黙っていた

ある日 ふと 思った  
あいさつしてみよう

「おはよう ーいごます。」

返事が あった

その日から 友達に なった

ほころぶ

山田にしこ

こんこん

陸井絵夢

寝起きの脳内を活性化させる  
旨いコーヒーが飲みたい

甘く深く濃いテイストの粉は  
UCC珈琲 家庭の味

千里の片田舎の  
サイフォンコーヒーが飲みたい

フラスコの蒸気を

ポコポコと懐かしみながら

布から漏れいずる赤瑪瑙色の

一滴（ひとしずく）に

一時（ひととき）を忘れ得ぬ

職人技の

一杯を

こんこん とをたたくこんこん  
せきばらひ こんこん くみかはし  
こんこん さとされる こんこん  
とめどなく こんこん あふれる  
こんこん なみだのいづみ こんこん  
つきのひかり こんこん まちわびて  
こんこん ちぢにみだれ こんこん  
なくきつね こんこん なみだかれはて  
こんこん ゆめのなか こんこん  
ゆきがふる こんこん ふりつもしり  
こんこん ふりつづき こんこん

一・ 献 献      二・ 懇 惻      三・ 滾 滾  
四・ 焜 焜      五・ 来 ぬ 来 ぬ      六・ 困 混 恨  
七・ 痕 痕      八・ 昏 昏

# 随 筆

## 森鷗外と藤沢

井 口 鐵 介

古い本箱に岩波版の『鷗外全集』全三十八巻が並んでいる。第三十五巻が日記の部で、その中に「自記材料」があり、明治四十年五月二十日の記事は左のようである。

二十日、午前六時三十五分新橋を發し、藤沢に往く。検査所は大阪町にあり。

鷗外はなぜ藤沢を訪れたのか。それは一週間前の記事を読めば判明する。

十三日、午前五時十五分上野を發し、足利に往く。徴兵の事を視るなり。帰途足利学校と錢阿寺とを訪ふ。

鷗外はその後も忍・熊谷・石岡・大原・松本などに出張している。

大阪町は、藤沢宿の大久保町と坂戸町が合併した町で、現在の藤沢公民館のあたりに町役場があった。そこで徴兵検査が行われたのであろう。

鷗外は陸軍軍医として視察のために藤沢を訪れたのである。帰途に近くの遊行寺を訪ねたか否かは不明であるが、後年遊行寺と藤沢宿が関係する三つの作品が書かれた。以下簡略にそれらについて記しておく。

「寿阿弥の手紙」 浅草の日輪寺のこと、文政十一年の遊行上人廻国のことが書かれている。日輪寺は時宗総本山遊行寺の触頭を勤める寺である。

「細木香以」 遊行寺の阿弥号について詳しく述べられている。幕末期の通人香以が遊行寺の阿弥号を尊重し、取り巻きたちに阿弥号を与えた。香以は鎌倉や江の島を遊覧した際、遊行寺に登山し藤沢上人に拝謁している。

「伊沢蘭軒」 蘭軒の友人菅茶山が江戸から故郷の福山へ帰る途中、藤沢宿の旅館に宿泊したことが記されている。文化十二年二月のことである。

廿八日。放晴。鎌倉の遊を遂ぐるを得たり。七里が浜を経て、絵の島に至り、藤沢駅に宿す。

この旅については茶山の旅日記「東征暦」や同行の河崎敬軒が著した『驥嶽日記』があり、旅の様子が詳しく記されている。茶山たちは藤沢宿のたばこ

屋という旅館に泊まり、甚だ冷遇されたことも描かれている。

『鷗外全集』第三十六巻は書簡の部で、ここに鵠沼の地名が出てくる。明治四十四年八月、鷗外が後輩の軍医である橋本監次郎に岳父の診察を依頼した書簡である。

拝啓先日一寸御話申し上げ候小生岳父、明八日御診察下されたく願ひ上げ候、陸軍省の方は御届けに及ばず、小生明日出省、然るべく取り計らい申すべく候、患者は神奈川県藤沢町鵠沼村字下鰯<sup>きとむし</sup>荒木別荘にて  
荒木博臣  
汽車は藤沢駅下車、それより三十町程、人力車に御座候、

八月七日団子坂森林太郎 橋本監次郎様  
荒木博臣は鷗外の妻志げ子の父で、鵠沼村に別荘があった。字下鰯は現在の鵠沼海岸三丁目あたりである。鷗外が鵠沼村に立ち寄ったことがあったか否か。それは不明である。

## 根っこの思い

石井明子

春がきて

いつものように

梅の花が咲き

水仙の花が咲き

そして 今年も

いつものように

過ぎてゆくのでしょうか

これをふとした時に書き残していつてしまった夫の心を誰がしるのだろうか。

今、夏の終りをむかえ、我家の庭一面、朝顔の花が咲きみだれ、一勢に天に向って喜びを伝えているみたいだ。朝顔は几帳面で前日から花の形を整え、白い花弁もずっと伸ばし先っぽをちよつとねじり、美しい赤紫色に内側を染め、朝日がのぼるのを静か

私の夫は時の止まった世界に居るのかしら。でも私と夫の共通した根がある限り、時間のある、ない世界は別であろうが共に枝をはって共に伸びている。全ての生物と共に。

春がきて

いつものように

梅の花が咲き

水仙の花が咲き

そして 今年も

いつものように

過ぎてゆくのでしょうか

でもその根をはった一つの種からは、次の年に沢山の花を咲かせ続ける——見事な花の命だ。その花の命はどこに在るのだろうか、いや根だろうか。

神は全ての生物に種と根を与え、それはつながっている。人間も全く同じだろうと思う。

夫と妻は一つの根を共有し、そこから、子や、親や兄弟、友人、社会と枝を広げて一本の木になってゆく。私にも障害を与えられた子を含め三人の子がこの根から伸びた幹に、又それ／＼の枝をはって伸びている。天は、時間を与えて、全ての生物の根から枝をはり生きる様をみているのだろうか。

## 漏水の顛末

市川光治

(文芸光風)

洗面所の壁の中から音が聞こえる。シャーというような音である。

耳を澄まさなければ聞こえない小さな音である。

念のため、水道のメーターを見てみると、小さな円盤がくるくる回っている。すべての水栓は閉めてある。これは、給水管に漏水があるのではないか。

イエローページの補修会社に電話してみると、漏水であるという。電話したのは、午後二時頃であった。三時ぐらいには、点検に来られるという。

しばらくすると、補修会社から連絡があり、車の渋滞のため、三時半ぐらいの到着になるという。

ようやく三時半に到着したのは、三五歳ぐらいの小太りの男であった。家の内外を三十分ほど点検した結果、給湯管から漏水していることが分かった、と男は言った。

私の家は八年ほど前にオール電化としたのだが、夜間の安い電気料金の時、湯を沸かしタンクに貯蔵するシステムとなっている。湯はそのタンクから浴室、洗面所、台所に供給されている。湯の温度は八〇℃なのだという。ガス給湯であれば四十五℃ぐらいなのだから、かなり高温である。そのため給湯管が劣化しやすいという。

結論は老朽化した給湯管をすべてやり替える必要

## 弦の繋がり

梅澤 輝也

先日、友からハガキが届いた。“老妻は歩行困難で養老ホーム、自分も最近杖をついて歩く日々、近々、老妻と共に養老ホームで過ごすことに決めた。ついでにはウクレレを引き取ってくれないか”と。そのウクレレは、彼と一緒にお茶の水の楽器店を巡り、音が気に入って求めたものだ。そしてゆっくりと、ここまでの彼との出来事が、私の脳裏に浮んできた。

彼との出会いは七十一年前、選択した第2外国語が同じで一緒のクラスになった。机の席も近かったので、互いにウマが合うのを何となく感じるようになった。大学後期では選択したゼミが異なり、卒業後の就職先の勤務地も異なったので、接する機会は減っていった。それでも折を見て空白を埋めてきた。彼が大阪に出張で来たときはキタやミナミを巡ったり、私が香港で合併事業の立ち上げに苦

がある、というものだった。

工事日は最速で三日後、になるという。それまでは、漏水したままになるので、できるだけ水栓を止めたほうが良いという。それから、三日後までは、必要な時以外は、水栓を止めることにした。夜はずっと止めることにした。これで一番困ったのはトイレであった。バケツで水を流せばよいと、小太りの男は言っていた。そうするしかなかった。

水がいつでも出ることの有難さをしみじみ味わった。

やっと三日後に工事に来てくれた時は、心底ほっとした。

復旧工事は半日ほどで完了した。

以前給水管からの漏水があったときは、水道料金が倍ぐらいいになって、驚いたのだが今回は発見が早かったせい、水道料金はほとんどいつもと変わらなかった。

闘っていた時は、彼は出張の度に必ずに立ち寄ってくれた。

退職後、私はフランス語をもう一度学びたいとリヨンに語学研修を思い立ち、そのことを彼に告げると「俺もゆくー」と、再び机を並べて学ぶことになった。彼の奥方からは「あなたがたの様なおじさんを受け入れてくれるホームステイは無いわよ」と云われたが、私たちはそれぞれ素敵なホームステイ先に恵まれ、ミニ留学生生活を楽しんだ。週末は二人であるちこちと小旅行、とりわけ記憶に鮮明に残っているのは、モンブランの旅である。

ホームステイ先のマダムは、観光客の多いシャモニーを外し、少し離れた小さなホテルをとってくれた。列車でリヨンを出発、途中で登山電車に乗換え、アルジェンテールに到着。翌日、シャモニー（1035米）から70人乗りのロープウェイで一気に3777米のエギュ・ドゥ・ミディ山頂駅へ、展望台からアルプス最高峰モンブラン（4810メートル）を眼前に仰ぎ見た。これまでに感じたことの無い感動と興奮を彼と共に味わい、夢中でカメラのシャッターを押しまくった。さらに、そこから小型

ロープウェイでイタリア国境地点にあるエルプロネールへ、視界に広がる、峻嶒だが美しいアルプスのパノラマに息をのみ、白銀の異界に漂う心地に身をゆだねた。

彼から葉書を貰って十日ほど経って、クロネコ便でウクレレが届いた。私はすぐにケースを開けて弾いてみた。深く響く弦の振動に誘われて、彼との縁の情景が浮かんできた。

私は、なんども彼に電話した。だが、自宅にも、携帯にも繋がらない。メールも届かない。どうしたのだろう？ もはや浮世を逃れて隠遁の生活に入ってしまったのかと、消息を案じる日々……。

辛うじて繋がっているのは手元のウクレレの四本の弦しかない。

## 戦争を終らせて

大和田 三代子

(はまゆう)

今年も、広島・長崎の原爆の日を迎え、多くの人が、犠牲者たちに手を合せ、敬けんな祈りを捧げた。何の罪もない子どもたちや先の短い老人たちが、原爆の犠牲になった。

私たち家族は、父の軍属の異動で、昭和十八年十二月に千葉県の銚子へ、十九年の十二月に広島へ、二十年の七月末に新潟県へと異動になった。新潟県に着くか、着かないかの内に、広島、次いで長崎に原爆が落とされた。私はまだ小学生で、よく分からなかったが、八月十五日、父と母が二人並んで窓の方を向いて、直立不動で涙を流して、天皇陛下のお話を聞いていた姿を今でもはっきり覚えている。戦争に負けたんだと、後から聞いた。

しかし、毎年原爆の記念の日を迎えて、多くの犠

牲者の人々を思うと、今の平和な暮らしのありがたさと共にその人々の悲しみのあることを忘れてはならないと思っている。

現在も世界のあちらこちらで戦争は止むことなく続き、罪のない子どもたちが犠牲になっている姿をテレビで見るとたまらない。世界の国々が協力し合って、科学を、この地球上の生き物や人々の幸せのために使っていただくことは出来ないだろうかと願う。

戦争で犠牲になった人々、私たちだって何時その立場になるか、わからないことを思うと恐ろしい。改めて今まで犠牲になった皆さんへ強く深い祈りをささげたい。

幸せな明日のあることを祈りつつ。

令和六年八月

## 蛤

桐山 さとみ

夏のある日、片瀬の砂浜。藤色の空は晴れ、サーファーが沖に浮かぶ浜辺は平日の早い時間とあってか全体にのんびりとしていた。

波打ち際を一人歩いていた私は、足元に二枚貝を見つけた。象牙色と薄茶の縞模様、大きさは拾い上げた手のひらほどの立派な蛤だ。

持ち帰り、バター醤油でいただきたいところだったが私は善良な一般市民である。元に戻して去ったのに、しばらく後に道を引き返して再び出会った。今度の彼だか彼女だかは、殻の外に白い足を出してひらひらさせていた。

半ば海水に浸かった砂の上で、日向ぼつこのつもりだろうか呑気なものだ。自分の美味しくも傷付きやすい部分を、私のようなニンゲンに晒して平気にしている。他の小さな貝たちは、被っていた砂を波



にさらわれただけで慌てて潜っていくのに。

貫禄、という言葉が脳裏に浮かぶ。ここまで成長するまでには危機的瞬間も多くあったはずだ。幾度死線を潜り抜けたら、こんなふうに「生きるも是、死ぬもまた是」の佇まいを身につけられるのだろうか・・・などと考えてしまうほど、あまりに蛤は堂々としていた。

いいな。胸の中だけで呟いた。正直、微かな羨望をこの軟体動物に覚えた。尊敬の念すら抱いたかもしれない。

私も、ほんの少しでも。頑なな精神の殻を自ら抉じ開け、弱く柔らかな部分を日光の下に差し出すことができたなら、と。

恐れを核に、幾重にも不安を巻き付けて育つ黒真珠と共にこれまで生きてきたように思う。歪な異物に胃の底が痛んでも、吐き出すこともできず抱え続けている厄介な自分の一部。その正体は何かと突き詰めていけば結局のところ、生きていく不安と死への恐怖に集約するような気がしている。

けれども、そろそろ疲れてきた。ずっと怖がりながら私は生きてきたし、たぶんこれからもそう

のだ。きつと臨終の際にも嫌だ嫌だとはやきながら旅立つのだろう。

だから、もう諦めたい。

その辺に大の字に寝転がり、さあ如何様にでもと運命を受け入れる諦観を持ちたい。

美しい朝の浜辺でゆったりと、海水に足を浸して夢が見られるように。

波音が近く聞こえて、泡立つさざなみがくるぶしを洗った。これまでで一番遠くまで海岸線が伸びる。白い波が浜砂と共に蛤を巻き込んで、見えなくして、そうして退いていった後には何も残さなかった。

さよならと、口の中だけで別れを告げた。貝の寿命とはどれほどなのか私は知らない。けれど、なるべく健やかにあるようにと祈りながら立ち上がった。

目線を上げた先には空との境目が淡く溶けた水平線があって、その下の海には今日も無数のいのちが揺蕩っている。

## せりちゃんカルタ

久保田 文子

(はまゆう)

「わたしはね、しょうらいアイドルになりますよ」  
孫のせりちゃんと「せりちゃんカルタ」を作った。  
せりちゃんは五歳。ママはお仕事、お姉ちゃんは  
中三で受験勉強に余念なく、パパと二人で遊びに来  
たのだ。

「せりちゃんカルタを作ろうー」という私の提案に、  
せりちゃんもパパもすっかり乗り気。パパは早速コ  
ピー用紙を八等分に切り、取り札と読み札を作成。

私が「あ」と書いて、

「あさがきた。きょうもげんきなせりちゃんだ」  
と書くと、パパがすかさず、

「いそごうよ。九じまでつこうよはいくえん」  
と。せわしい朝の苦勞がにじみ出る。

さあ、せりちゃんの番だ。

「うたうのがだいすきのしいせりちゃんだ」

すらすら出てきた。次から次へと出てくる。

「えんていで、いねをそだててみずあげる」

「おくじょうのはたけでなすのしゅうかくだ」

保育園で野菜を育てているのだとわかる。

「かあさんにほめられにつこりせりちゃんだ」

「きあいがね、とてもはいつたうんどうかい」

パパの絵札も次々完成。握りこぶしのせりちゃん  
が描かれる。ママもお姉ちゃんもそっくりだ。

息子（パパ）は、小さい頃からよく絵を描いてい  
た。中学生の頃の自作のマンガノートや、授業の  
ノートのはじに描かれたパラパラマンガ。なかなか  
の出来で、今になりマンガ家になってもよかったの  
にな、と内心想うほどである。きつと先生の話も上  
の空で聞いていたのだろう。

今こそ才能発揮。さすがにどんな絵札は描き上  
がる。せりちゃんは忙しい。パパの絵札に色を塗り  
ながらも、私が「さ」と言う、と、

「さあいこう。たのしいさんぽにレッツゴー」

「てをたたき、みんなでダンスをおどろうよ」

「ランドセル、もうすぐわたしはいちねんせい」

ランドセル何色買ってあげようかなって聞く暇も

ないほど次が出る。

「よるのかぜ、ひゅうひゅうつめたくふいている」

私も書きとめるのに忙しい。せりちゃんも読み札を書く。大きな字で、「た」を「タ」と書いたり、「く」を「ク」と書いたり。でも字は上手。

締めくくりは冒頭の「わ」。

「わたしはね、しょうらいアイドルになりますよ」

アイドルになりたいではなく、なりますよと言いつ切る。

ベイスターズのチアダンスもお姉ちゃんを追いかけて毎週練習に励む。足を高く上げたり、足を広げて一文字。びっくり。じいじもハラハラ。かわいい仕草に笑いは絶えない。

アイドルになったせりちゃんを、じいじと一緒に見たいものである。

お正月はみんなでにぎやかにカルタ取り。今から楽しみだ。

## 私の心の世界フランス

慶野 千賀子

いつも心から離れない場所がある。フランスシャルルドゴール空港に初めて降り立った。寒い冬の朝、そこは別世界だった。フランス映画の中に入った様な私が別の私になった。

セーヌ川に掛かるミラボー橋にたたずみ、一人万歳と叫んだ。22歳の時の卒業旅行。感動のロワールの古城。アルル、アヴィニオン、マルセイユ、トレッツに行きセザンヌが愛したサント・ヴィクトワール山を眺めた。

再び訪れたパリは少し大人びた気持ちにしてくれた。マキシムドパリに流れるアコーディオンの調べ、深いワインの味わい。慣れた足どりで歩いたシャンゼリゼ通りそして凱旋門。若い心に刻まれたパリは魅惑で溢れていた。

私をフランスへと導いてくれたのはお土産のフランス人形。中学生の時から憧れの場所。パリの

空の下での曲を耳にする度に懐かしきパリを想う。長い年月を経て還暦を過ぎた今、不思議にもフランスと私の心の距離は近い。

## 春の嵐のバスツアー

小池 貴瓊子

新聞のチラシに載っていたミステリーツアーにふと興味を魅かれて未だ二月初めなのに申し込んで了った。ミステリーツアー（日帰りバス旅行）は、一体どこへ連れてってくれるのかしら？と興味津津。まるで若い乙女のように心が弾み、三月末になれば暖かくなり体も楽になると信じ込んでいた。自分がもう傘寿を過ぎて決して若くないのは自覚している。

バスツアーの目的地（メーン）は苺狩りと分った。苺狩りは二、三回体験済みで珍しくないけれど、コロナ禍以来どこへも外出せず、病院とスーパーをゆききする日々を暮らしていたので、どうしても気分

転換が欲しかった点もある。所が当日は春の嵐で風雨が強く荒れて怖い程。でもキャンセルするのも悔しいと意地を出して参加すると決めた。その朝は大きな傘がおしゃかになる程の風。そして激しい雨の中、集合場所迄やつと辿り着き、ようやくバスに乗りこみ心より安堵した。高速道路を走り、バスが静岡県方面に近づく頃は何と空が明るくなり日ざしも出て、やれ／＼と思った。お天気の都合で苺狩りは後回しとなり、先づ観光したのは『旧沼津御用邸』の見学で、昭和天皇が御幼少時に、おすごしになったという。とっても広くて沢山の松の大きな木が潮風でざわ／＼と騒いで何とも言えぬ風のざわめきが、まるで往事の貴人の魂の叫びのように聞こえ、今もこの場所に天皇陛下始め仕えた立派な人々の魂が残り息づいているかのように感じた。往事を偲ぶすがは確かにあった。

そのあとは観光客専門の大きく広いレストランで昼食を摂った。一人参加の私は独りの席でも、ちっとも寂しいとは思わなかった。

昼食後すぐにバスは苺狩りのビニールハウスへ……。所がお腹が一杯で大好きな苺もあまり食

べられず残念……。お天気さえ良ければ昼食前の午前に苺狩りの筈だったのに……。

最後の観光は『三島大社』。桜は未だ開花前だったが、満開となればきつと素晴らしいと思う境内であり、夜桜は尚のことと想像できた。風雨も止み静かになり、決して好天といえないが、一枚だけ知らない人に記念としてシャッターをおしてもらった。何しろ日帰りのバスツアーで一番格安の費用で全然豪華な旅ではないが、私にとりこれが人生最後の旅になるかも？とそんな気がした。普段古い我が家にお閉じこもりのさみしい私には、息ぬきが出来た一時をすごせたことはまず／＼幸せといえよう。バスの乗り降りも人の世話にならず独自で行動して、時間も厳守して辻堂の駅の近く迄無事にバスは送り届けてくれてさよならした。唯苺狩りで苺を思う存分食べられなかったことが心残りだ。子供みたくに苺の大好きな私は、もつと／＼一杯苺を食べてみたかったので……。

おわり

## 雨の日の思い出

斉藤 絹美

何時ごろだったろうか、足の痛みを感じてベッドに起き上ったのはたしか明け方近くだったと思う。外は大雨の様子、窓越しに見える木が大きくゆれている。今日は私の七十六歳の誕生日などいろいろなことを思いながらひと時を過ぎていた時、降りしきる雨音にまじって「バーバ——」と声が出たような気がした。そして、トントんとドアをノックする音、私はあわててドアを開けた。そこにはずぶぬれになった孫がいた。びっくりした私は抱きかかえるようにして中へ入れた。「家で何かあったのかも知れない」不安は大きくなってくる。やっと落着きを取り戻した時、おそろおそろ「どうしたの」改めて声をかけてみた。「お母さんが買い物に行ったきり帰って来ない。広い家に一人で居るのが恐くなって鎌倉からバーバのところをめざして来た」とふるえながら言った。聞けば途中でパンクした自転車

押しながら、海岸通りをぬけ、鶴沼小学校の前を通り、川辺に出たと言う。川辺の道はとてもせまく、明治小学校の前を通り、雨の日は道がせまいため、車が一台通るたびに泥水をバシャ／＼あびながらやっと通りぬけた。小学四年生の孫は学年の中でも、一番小さかったこともあり子供にとってどんなに大変だったことか。一度いったことのある記憶をたよりに、バーバに逢えると勇気をふるい起して何と三時間あまりもかけて、歩いて来たのだ。

「もう大丈夫だよ、今夜はバーバと寝よう」そこにはやっと安心した孫の顔があった。そんな時、娘からの電話。「子どもがいない。まさかと思うが」緊迫した声が受話器を通して伝わって来た。

「買物に時間がかかって遅くなって」と早口で言っただ。「ここに居るよ」ずぶぬれになって来たことをあらあ話した。娘もほっとしたことは言うまでもない。あれから十四年たった今でも、その時のことが走馬灯のように思い出して眠れないこともあり、涙が出る。あの時、孫を抱きかかえた記憶がきのうの事のように蘇って来る。

孫にとっては一生味わうことのない恐怖だったに

違いない。青空が晴れ渡った次の日、勇気を誉めてあげながら鎌倉まで送って行ったことなどを思いだし、私の七十六歳の誕生日。九年前の忘れられない雨の日の思い出である。

私の家は、藤沢市遠藤、雨の中を良く来たと思っっている。

そして「バーバの家がみえた時はほっとした」と孫の一言に私も又あの雨の日のことを思いだしている。

## 自民党総裁選に私が思うこと

榊原 百合子

この秋自民党総裁選がおこなわれた。過去最多の九名がなりのりをあげた。私が注目したのは、高市早苗氏だった。高市氏の推薦人は、二〇名のうち十三名が、裏金議員である。

何故、裏金、つまり、脱税にも通じる事をしたのにその人達が、平気で推薦人になれたのか、自民党

はおかしいと思わないのだろうか。一般人は、裏金などしたら、脱税で処罰される。高市氏は、国会議員にも、地方議員にも人気があり、日々の総裁選の中で、圧倒的に上位を守り、ガラスの天井をつきぬけると思った程だった。しかし、結果は、わずかの差で石破茂が総裁となった。私は、まあいいわと思った。高市氏は、かつて総務大臣の時、NHKなど報道に対して「電波中止」などの発言をして人々のひんしゆくをかった事があった。高市氏がならなくてほっとした。

私の様な思いを心の中でした人も、少なくないのではないだろうか。

しかし、石破氏が、総裁選の時は、ルールと守り、原点に戻り、真実を語り、謙虚に、公正公平に、と語っていた。が、どおだろうか。

五回目の挑戦で自民党総裁の座を射止めたら、その舌の根もかわかぬうちに、自民党内部に耳を傾けて、全国民や野党の方々に寄り添い論戦をかわすと言っていたが、それは守られなかった。

すぐ、解散し選挙へとつき進んだ。

裏金問題で処分された議員達も公認もし、比例も

よしとするという。まったくもって、納得と共感内閣と、石破茂自民党総裁は、そして、内閣総理大臣は、国民に受け入れられるだろうか。私達有権者は、正確な情報、信頼できる情報を身につけて、あやまった、あやふやな情報にまどわされずに、問題を考えていかなければならないと思うのである。

そのため、ニュースは大切だ。そのニュースを報道するジャーナリストの人間力に私は大いに期待する。私は毎日一番に新聞を読む。新聞の記事に関心をもつ事は大切だと思う。そして、その内容を、友人達に話し合い、選挙に生かしたいと思うのである。

テレビの画面からは、ひさんな戦争の状況、石川県の能登の災害、悲しい事実が多くある。しかし、新聞記事や、テレビのニュースなど、私なりに受け止め、社会に正しくあるべき行動をとる事が必要だと思うのです。私一人の力なんてと思わず、まず第一歩、民主主義を守ろう。そして、私はニュースは、必ず人々の共感を得て、いつかは、その息吹きは必ず大きな原動力となっていくと思うのです。一人一人の人間の行動は、主権者としての国民の義務なのだと思ふのです。

## 初めての人

里 香り

高校三年生になった秋日和の日曜日の午後家族と楽しく過ごして居た時突然倉野さんが自転車で自宅を尋ねて来てくれたのでした。暫く玄関先で立話をして居たのですが母が、「折角だからお部屋に入ってもらいなさい」と云ったので父も居間に居ましたので案内しました。遠慮するようすもなく家族の中に入り皆と話し始めました。御実家の話等をして、まだ冷蔵庫もなかった頃なので井戸で瓜とか、西瓜とか色々な物を冷やして食べるとか、家の広いようす又御家族のようすを話して居ました。父とすぐに打ち解けて、家族と共に楽しく話して居ました。暫くすると「今日は、お天気が良いので、カメラを持って来て居て近くの公園で写真を撮りに行こうと思うけれど都合はどうか」と云いました。父が「では、姉も共に行くように」との事で近くの大きな花壇とかベンチのある公園に出掛けました。

小一時間程私と姉が花壇の前に座って並んだり、私が、自転車のペダルを片足で踏んだポーズを撮ったり、私と倉野さんの二人で、ベンチに座るようすを撮ったりして過ごしました。する事もなくなったので三人で又自宅迄共に楽しく話をしながら帰りました。私は、倉野さんと十分程共に歩き、姿が見えなくなる迄見送りました。一ヶ月程した頃、私が急に倉野さんの部屋を訪れると、二時頃でしたがまだ布団が敷かれたまゝになって居ました。私は悪びれもせずいつものように部屋へ入りました。倉野さんが私を抱いて布団の中へと誘いました。私に手枕をして二人は静かにして横になりました。私も同じように目を閉じて静かな時間が流れたのでした。どちらからともなく衣服の乱れもないまゝ、起きて居ました。二人の間で優しさと、暖さを感じ合って居ました。いつもの帰る時間となり私は明るく「又来るネ」とサッパリとした口調で別れを告げました。彼は優しくほゝえんで静かに只領づいたのでした。ドアを閉めて外に出た私は、優しい気持ちと心踊るような嬉しさを胸に家路へとついたのでした。

終り

## お友達がたくさん出来ました

しあわせ上手の高橋

ソーシャル・ネットワーク・サービス所謂SNSと言われるアプリの中でコミュニケーション・ツールがある。そのアプリのひとつが「クラブハウス」。クラブハウスはどなたでも加入できて、お部屋のひとつひとつが表示されていて、基本的に好きな部屋に入ることが出来る（鍵部屋でなければ）。2020年を過ぎて運用されたのでご存じでない方も大勢いらっしゃるのだがSNSなので日本全国、世界中の人々と意見を交換することが可能で、参加する場合は必ず登録名とパーソナルアイコンを表示するので理解できない言語で唐突に会話することはない。

とは言っても最初会話する相手とはプロフィールに書かれた程度の情報しか伝わらないので、その相手をもっと理解するのと、その部屋にはどんな人が参加しているのか理解を深めるためには、昔から

PC上で行われるようなオープンチャットの延長にある「オフ会」に参加してみると、実際の生きた姿に出会えるのだから素晴らしい。

わたしがクラブハウスを初めて知った頃は招待制だった。もともと誰かとコミュニケーションをとるのは苦手だったので、X（ツイッター）のスペースに参加していた。その部屋の方が「クラブハウスに入ってみたら？」と誘ってくださって、孤独と仲良しな毎日だし、相手の本当の顔もわからないけれど、毎日ラジオ感覚でクラブハウスを聞いている。

「神社についてあれやこれやと語る部屋」があつて、わたしも毎日のように参加していたのでお互い少しずつどんな人なのか理解できていくのが不思議。「しあわせ上手の高橋さん、こんにちは」と挨拶されるようになるし、その部屋にいる人たちの関係性も見えてくる。神社部屋のふたりの屋主は九州人で一般的にいう夫婦ではないけれど、表面的にはビジネスパートナーと言っていたのでまるで夫婦なのである人間関係は現実においても難しい。理解し合えないでブロックされる人もいるし、現実について交流を深める人もいる。

## 文化の日に寄せて

自然

我のみの菊日和とはゆめおもはじ 虚子

昭和二十九年十一月三日 宮中参内 文化勲章拝受

昭和二十九年十一月三日、高浜虚子は俳人として初めての文化勲章を受け、感慨をこのように詠んだ。この時虚子の胸に去来したものは、なんであつたろうか。

「思えば、明治・大正・昭和、三代にわたって頑張つてここまでやってきた。若き日に子規と出会い、勧められて俳句を始め、極堂からホトトギスを受け継ぎ、俳句のみならず、和歌、小説など、文芸全般の普及に努力してきた。漱石に小説を書かせたこともあった。病臥している子規からの申し出を断り、しばらくは小説に没入したこともあったが、仲間であつた河東碧梧桐が自由律俳句を指向すること

「神社の部屋」でオフ会という名の直会に参加して神社の神主さんにも会えたとし、冷えたビール、海の幸山の幸をたらふくいただいた。初めてお会いしたのに皆さん優しく丁寧に接してくれたのだ。帰り道も教えてくれてほろ酔いながら帰り道である神社の社務所でもとても有意義なひとときを過ごしたことに感謝したのだ。

ほかにオフ会でお邪魔したのは「ガンダムについて語る部屋」「声優・平野文さんと交流する部屋」だ。平野さんのお知り合いで食肉等を提供している方の立ち飲みバーでアルコールと美味しい料理をご馳走になった。変な話パートナーには恵まれないが、たくさんの貴重な経験をしたわたしはとても恵まれているのだ。



を知り、私は強く反発し、俳句の世界に戻り、俳句の伝統「花鳥諷詠」「客観写生」「有季定型」を主張し、守り通してきた、あの頃こんな句を詠んだことも思ひ出される。

春風や闘志いだきて丘に立つ

その間いろんなこともあった、子規も碧梧桐も亡くなってしまった。碧梧桐とは、たもとを分かって、しまったが、それは方向性の問題だけで、彼は終生の親友であった。言わば喧嘩独楽で彼を弾き飛ばしたようなものだ。これが追悼句だ。

たとふれば独楽のはちける如くなり

戦後になって桑原武夫の「俳句第二芸術論」なるものも出てきて、私も標的にされたが、これを黙殺した、ひたすら伝統俳句の世界にいて、二十万句にも及ぶ俳句を詠み続けてきた。

去年今年貫く棒のごときもの

と詠んだこともあった。そして今日、俳句は我が国の伝統芸術として認められ、わが門弟は全国に散らばり、隆盛を極めている。子供たちもこの道を志してくれた。

きょうは文化の日、皇居に招かれ天皇陛下から勲

章をいただき、親しくお言葉まで頂戴した。長く生きて、健康で今日を迎えることができたが、もし子規が生きていたらと思うことがある。受賞が決まっていたの十月二十五日、報告の墓前でこう詠んだ。

参りたる墓は黙して語らざる

見渡せば皇居前庭には菊の花が飾られ、それも満開だ。まさに菊日和だなあ」

とまあそんなふうに思ったのだろうかと思像してみた。「ゆめおもはじ」この句は字余りである。定型にこだわれば収めることもできたのに、あえてそうしなかったのは、「ゆめ」を挿入するほうが良いと虚子の心が、あえてそうさせたのだろう。

この日はこんな句も詠んでいる。

菊の日も暮れ方になり疲れけり 虚子

## ねずみ年

篠原貴子

(はまゆう)

一日の活動が終って、疲れと共に深い眠りに付いたのは、十二時頃だったと思う。

寒い冬の日、暖かい布団の中でぬくもりが何とも言えず、うつらうつらとやまと眠りに付いた深夜のことである。

「助けて」女の人の悲鳴。玄関のドアをすごい勢いでたたいていた。玄関のそばに寝ていた私は飛び起きてドアを開けた。そこには髪ふり乱した五十代位の女性が転がるように入って来た。「殺される」と一言低い声でつぶやいていた。

只事ではないと感じた私は、消したばかりの石油ストーブをつけて暖まってもらい話を聞こうとしたが、女の人は震えて言葉にならない。ずっと外を気にしているようす。近所の人ではなく顔は知らない。遠くから来たのか、近くの人かも知る由もな

かった。ややしばらくして、落ち着いたのか、着ているものを整えて一時間位過ぎた頃、こうこうと電気の付いている我が家の外に人の影が。

「この野郎、出て来い」と怒声が聞こえ、玄関をドンドンと叩く男性の声。騒ぎで起きた夫は、女性を促して鍵を開けた。外には追いかけて来たのだろうか、大柄の男性が仁王立ちで立っていた。女性はペコリと頭を下げてその人と帰って行った。夫は落着いた口調で「夫婦喧嘩だろう」と言った。それから私にお説教が始まった。「お前は気が早い」「悪人だったら殺されてしまうぞ」「いきなりドアを開けるなんて」そして、「やっぱりねずみ年か」の一言には参った。子ども達も眠い目をこすりながら起きてきて、「お父さんの言う通りだよ」「お母さん、悪い人ぢゃあなくて良かったね」と。

一件落着いたのは、時計を見ると午前三時何があるかわからない中での一瞬の出来事だった。「助けてー」の声は今も耳に残っている。あれからどうなったのかは知る由もないが夫婦喧嘩は犬も食わないとの諺もあるが、反面、喧嘩が出来るほど仲がいいことなのかも知れないと思う。

以前、近所の親しい人が、夫に話していたことを聞いた事がある。「奥さんは穏やかな家の中は静かでしょう」との声に「見ると聞くとは大違い。家に来てみるとわかりますよ。ねずみ年ですから何でも集めてくるし、仕事をみつけては忙しくしてますよ、ちよろちよろとね。ハハハ」と笑っていた夫の声も忘れない。「ずい分だ」と思う反面、「そうかも知れない」と思ったりもする。

又遠い昔、祖母がつぶやいていた事を思いだした。「貴子はあちこちで仕事をしてはそのまま。パアチャンはあと片付けで忙しい」私の性格とはいえ、自分では掌握できない面もあることを、近くにいる人は良く見ているようだ。年を重ねた今は、一つひとつのことをゆつくりと丁寧に片づけていると自負している。

## 人生で忘れられない風景

澁谷 恵子

68年間生きて来た中で、いくつかの忘れられない景色があります。皆さんもそうだと思います。

一つ思い出すと紐付けの様に次々と思ひ出されます。

向かい側の山の上に浮かぶノイシュバン・シュタイン城。城壁から見下ろしたローテンブルグの景色。

ロンドンアイから見下ろしたテムズ川沿いの風景。三回目のロンドンに着いたばかりに見た虹の景色。

寒さに震えながら歩いた景福宮の凍りついた池の周り。ソウルのホテルの窓から見た墨絵の様な山々。地下鉄を下りた途端にたまたま強烈な生薬の香り。

映画の一場面の様だった夜のベニスの風景。

でも、景勝地ばかりでなくて、ローテンブルクを主人と歩いていたら、「ヤパーニヤー（日本人だー）」

と子供に言われたり、日本人とわかってもらえてうれしかったりしました。6月の平日のミュンヘンでは、夕方6時前に父親と子供達がプールに向かう姿にうらやましく、日本では、考えられないと思いました。

名物や美味しい物もいただきましたが、やはり、日本のごはんや、お家ごはんが、美味しくほっとします。

国内の忘れられない風景もあります。

近年訪ねた場所は、京都、軽井沢、山中湖、数年前が松江や出雲等です。

松江と出雲は、高校の修学旅行から二度目の訪問でした。神無月には、全国の神様が、集まると言う出雲大社のたたずまいは美しく松江城や湖の美しい夕日が印象に残ります。

京都は、何度かの二条城ですがその歴史を考えて感慨深いです。外国のお城にも負けない將軍の御殿にふさわしい設えです。

久し振りに行った山中湖。私達は、天気の良い日には海岸に行けば美しい大きな富士山を眺める事が出来ますが、やはり、湖の向こうに、大きな美しい

富士山を見ると、日本に住んで良かったと言う思いが沸いて来るので不思議です。

愛犬のモコが今年七月、十六才半で亡くなってしまい一緒に連れて行ってあげられなかったのが残念です。

軽井沢には、何度か連れて行きました。周遊バスにも主人が膝に抱いてのせ、大人しくて、良い子と言われてうれしそうでした。

町立植物園は、犬も一緒に入れて花々や植物を楽しみました。今となつては忘れられない風景です。

一番大事な風景を忘れるところでした。

モコと巡った近くの公園の道、砂浜や庭の道を二度と一緒に歩けないのは寂しいものです。

もっと、忘れられない景色を増やして、それを陶板の上にも描きたいと思っているのでモコ、見ていてくださいね。

## ボクらのスタンド・バイ・ミー

竜田 孝 則

「じえつたいに夫婦岩へいつてはあきませんよ」。校長先生のこの一言が中一のボクらの夏休み、最大のイベントを決定した。

夫婦岩周辺の海底に、米軍の置き土産の20ミリ機関砲の薬莖が大量に沈んでいるらしい。分解して大けがをした子もいたそうだ。

禁止されたら行かんとあかん。行かんと中学生の一分にもとる。

海水が急に冷たくなってきた。深くなったのだ。

何か気味の悪いものが潜んでいてもおかしくないような海の色だった。灯台に近づくと、潮流が巻き込んでおり、自然に背面に吸い寄せられた。鉄梯子につかまって、お互いの顔を見合わせた。唇は色を失い、歯がカチカチ音を立てていた。

「ええか、怖がるな。あとちょっとじゃ」とアニキ

は、まったく思えなかった。

「ほんじゃな」。アニキは荒れ狂う急流に飛び込み、抜き手を切って潮流に乗り、呆然と見守るボクらを尻目に、あつという間に対岸にたどりついた。

そのとき、ボクらはあることに気がついた。

「始めから渡し船で来たら良かったんじゃ」。

なぜ、泳いでくることにしたんだろうか。そうか、あれはボクらの『スタンド・バイ・ミー』<sup>⑩</sup>だったんだ。

人生の一時期、それも早いうちに何かに夢中になり、蹉跌<sup>きさく</sup>を味わうのも、悪くはない。そう思うことにした。

あれから、65年。一緒に海を渡った友はもういない。だけど、みんなの息遣いや表情が、ありありと浮かんでくる。まだ、みんなはボクの中にいる。

⑩ スティーヴン・キング『スタンド・バイ・ミー』新潮社、1987年。

は確信に満ちた口調で言い切った。

実際、そこから二十メートルほど泳ぐと、水深はくるぶしほどになった。灯台の先は遠浅になっており、対岸まで歩けたのだった。

遥か彼方の夫婦岩に向かって、不安をふきとばすように、ボくら7人は行進した。

なんとか夫婦岩に到達したが、周りは十メートル以上の深さがあり、とてもではないが、薬莖を捜すところではなかった。でも、夫婦岩にたどり着いたことで感動してしまった。近くの海岸に上陸したボクラは砂浜に倒れこんで動けなくなった。背中を焼く夏の日差しが何とも心地良かった。しかし、喜びはそこまでだった。急に空気がざわつき始め、海の様相が一変した。鏡のようだった海面は波立ち、渦巻く急流に変貌した。潮止まりが終わったのだ。泳いで帰れない。

「渡し船で帰るんじゃな」と、アニキ。

これから辿らなければならない道中を考えると、気が遠くなりそうだった。

はだしである。炎天下である。岩だらけの山道や、溶けたアスファルトのバス道は、素足に優しいとい

## ウクライナとロシア、 ガザとイスラエルに思う

富 安 千鶴子

二〇二二年二月突然ロシアのウクライナ侵略が始まった。プーチンは「ウクライナに主権はない」と言い、メドヴェージェフは「地球上からウクライナはいずれ消える」と言った。ロシアの前身ソ連は消滅し、ウクライナ、バルト三国、中央アジア、ソ連連邦共和国は、独立の道を歩んだはずではなかったか。私は、朝日新聞本社のウクライナの報道写真展に足を運び涙した。そして、ウクライナ大使館へ出向き、現地の報道写真の許可をえて、ソフィアローレン主演の「ひまわり」の映画と共に、「ウクライナの鎮魂」と題して、写真展、映画鑑賞会を幾度となくした。映画ひまわりは、独ソ連の内容で、ウクライナが撮影場所であり、歴史的には両国に痛めつけられた地である。私は、昔日の旅でひまわり畑を実際に歩いたので思いが深かった。そんな折、二〇二



三年十月イスラム組織ハマスのイスラエル攻撃で、イスラエルはガザへ報復した。イスラエルは主権の為の戦争と言い、その様相は凄惨を極め、虐殺そのものだ。一九九三年九月のオスロ合意は何だったのだろうか。イスラエルとパレスチナ自治区は、お互いの存在意義を認めあい、和平交渉が始まったはずだったが。

それに対し国際社会は、どお対応し、見守ったのか。人権を守る、人権を侵害する行為をとめる、そんな合意だったのではなかったか。人権尊重、人道主義は普遍的価値で、国際社会が関与すべきではなからうか。

二〇〇一年九月、米国多発テロが起きたあたりから、何かが変化し、テロとの戦いを米国は主張し、軍事力による介入が始まったのだ。国際的認知された人道保護の責任は、次第に少なくなっていくた気がする。日々のニュースで目をおおいたくなる凄惨な場面が胸をさす。世界各国が歴史に背をむけることなく、団結して、新たな基準をつくり、動いてほしいと願うばかりである。

一九四五年国連憲章、一九四八年国連にて世界人

権宣言が採択されたのは何故だろうか、世界第一次、第二次大戦の各国の深い反省からの決別ではなかっただろうか。

「国家主権」、「戦時の民間人保護の国際人道法」この二点は重要なはずだ。主権国家への侵略は許してはならない。そして、戦時でも民間人を殺害しない、当り前の事なのだから。

日本は、一〇二代石破首相が誕生した。経済だけでなく、核をちらつかせる国々に対して、広島、長崎に原爆が落とされた唯一の日本。今こそ、核禁条約に、第一歩オプザーバーとして、参加してほしいと願う。日本だからこそ、人間の命の安全保障を第一に考えてほしい。日本が世界のモラル再生の為に力を尽してほしいと願うばかりである。加えて、広島、長崎を訪れ、学び、伝承し、原爆が世界で決して使用される事なく、日本が最後の地であってほしいと願う私である。

## 大庭城と舟地藏

中岡裕志

現役の頃、大場氏がいた。歴史好きの係長は、大場氏を時々「大庭景親」と呼んでいた。

管理事務所に寄る。管理人が展示してある上杉氏や太田道灌や舟地藏などについて説明してくれた。「このライフタウンは、狐や狸や猪も出そうな鬱蒼とした山林だった。令和三年に大庭城跡として市の指定史跡に指定され、大庭城印を作った。辻堂の浮世絵館に一枚三百円で売っているので帰りに寄ってよ」と言う。

横の石積み道の登る。明るい。三の曲輪である。まっすぐ歩くと二の曲輪。さらに歩くと一の曲輪である。

奥に大庭城跡の碑がある。

大庭城は、平安時代の末に「大庭御厨」と呼ばれる伊勢神宮の荘園を管理していた大庭氏が築いた。源頼朝が石橋山で兵を挙げたとき、平氏の総大将と

して頼朝を攻め、敗走させた大庭景親が知られているが、築城したのは景親の父といわれている。

二百三十年ほど経った戦国時代には、扇谷上杉の家宰・太田道灌が大々的に改修、築城した。太田道灌は、戦法にことのほか長じていたといわれる。

その一つは築城術で、その方法は、曲輪式築城法と呼ばれ、江戸時代の兵法家から「道灌かがり」と呼ばれたものである。

平城と独立した曲輪を核に、曲輪と曲輪の間に深い濠をめぐらす縄張りで、近世城郭の祖型となったものである。

その道灌が扇谷上杉定正に暗殺された後の永正九年（一五二二）、北条早雲が扇谷上杉氏の大庭城を攻めた。この時の城主は、定正の子・朝良である。

この時、大庭城の南側には沼が広がっており、北条勢は攻めあぐんでいた。

伝説によれば、この時、北条方は付近の老婆から「この沼は、引地川の土手を切れば水が引く」という話を聞いた。

すると口封じのために老婆を斬り殺し、すぐに沼を干し上げた。

北条方はやすやすと大庭城を攻め込み、落城させることに成功した。

里人は老婆を憐れみ、城下に地蔵を祀って弔った。小糸川に架かる大庭橋の袂にある舟地藏がそれである。

南入口を出る。舟地藏に手を合わせる。

帰りは、辻堂の浮世絵館に寄って大庭城印を買うことにした。

## 鎌倉街道で想うこと

永澤 征治

八十才の半ばとなると、毎日は無理だが、朝の散歩は大事な日課である。散歩のコースは、辻堂太平台から浜見山を通って辻堂海岸に出る道だ。途中、京都と鎌倉を往還する鎌倉街道を横断する。その時は何時も源頼朝という人物を思い出す。頼朝は生涯かけて京都の王権と対決した。鎌倉街道を綱引きの綱に例えれば、京都を少しでも鎌倉に近づけようと

綱を引っ張り続けたということである。平家を亡ぼし、奥州藤原氏を倒した後、つまり挙兵から十年経って、漸く上洛し、後白河法皇と、摂政の九条兼実（たかね）に頼朝は会った。それは、父義朝が朝敵として平清盛に討たれ、十三才の頼朝が二十年の流人生活を送ったのは違法であることを訴える為でもあった。平治の乱を起した義朝は二条天皇の命に従っただけであり、熊野から京へ帰った清盛側に後白河が付くと一転して天皇は源氏の義朝を朝敵とした事実を指摘した。

又、地方で実力をつけてきた武士団を無視した京都の日本統治体制は、もはや時代遅れであることも主張した。源頼朝の人物像は、一つは自己主張と行動に一貫性があること、二つ目は、時代の流れを先取りする能力に優れていたことであろう。三つ目と云って、だろうか、頼朝は女性運があった。

生命乞いをしてくれた清盛の継母池禅尼、二十年の流人生活を物心両面で援助した比企能、將軍としての頼朝を支え続けた北条政子がいる。

頼朝を尊敬していた徳川家康は、頼朝が鎌倉街道を通じて鎌倉へ帰る途中、辻堂辺りで落馬し、それ

が元で死に至ったこと、これは武家の統領に相応しくないとして、鎌倉幕府の歴史書「吾妻鏡」の中の頼朝の死の前三年の記事を永久欠書にしたと言う説がある。中世の歴史研究者は異説を主張しているが、私は、この家康説を好ましく思っている。

今年の秋は、九人が自民党総裁選に立候補し、衆院選もある。国民は皆、「真のリーダーとは」を充分考えさせられる機会となった。

今、歴史上の人物、源頼朝や徳川家康を、再研究してもいいのではないだろうか。

(令和六年十月十六日)

## オクラで元気に

ネ コ ス ケ

ビタミン、ミネラル、食物繊維が豊富なオクラは、夏のスタミナ野菜です。栄養効果も優れていて、ネバネバ成分はコレステロールの減少や血糖値の上昇抑制、高血圧の予防にも役立つそうです。

我が家では毎年、オクラを種から育てています。

四月末頃に種を蒔くと十日程で発芽します。その後間引きをし、本葉が二、三枚になって畑に植え付けます。上手に付かずに枯れてしまう苗もありますが、何本かは無事に育ってくれて、収穫ができています。

オクラは、花も楽しめます。クリーム色の花びらに中心が赤紫で、ハイビスカスや芙蓉の花にも似ています。花言葉は「恋で身が細る」だそうです。花は咲いても一日で落ちてしまいます。その後、ほっそりとしたオクラになることから、美しい花のはかない恋の気持ちを表しているような気がします。花が咲いた後、実が上向きになるというのもめずらしい野菜です。

オクラは種が二百円足らずで購入できて、収穫期が七月〜十月中旬までとコスパ最強の夏野菜です。ただ、ピーク時に大量収穫となり、消費するのに苦労しています。

友人、ご近所にお裾分けするのはもちろん固ゆでにして冷凍保存もしています。癖もなくどんな食材との組み合わせもできますが、朝食の味噌汁に入れば、汁ごと栄養を摂ると一日頑張れるような気がし

ます。

今年の猛暑もオクラパワ―で乗り切ろうと思っていた矢先のことです。突然、腹部に痒みと発疹が：年齢的に帯状疱疹では？と不安になりましたが、とりあえず薬局に駆け込みました。薬剤師さんの話では、毛虫などによる虫刺されではないか、とのことでした。思い当たるのはオクラの収穫です。無農薬で育てているため、どうしても毛虫やアブラ虫が発生してしまいます。長袖、長ズボンに手袋と注意はしていましたが、甘かったのかもしれない。

ステロイド軟膏塗布により、二週間程で痒みや発疹はようやく治りました。オクラに付いた毛虫が原因とは言いきれませんが、それ以降は、虫よけスプレーでの対策もし、十分注意しながら収穫するようにしました。

とんだハブニングもありましたが、毎年残暑の厳しい九月初旬に受ける人間ドックの結果が良好なのは、オクラのおかげかしら？と勝手な思い込みをしています。

## 日々雑感・その一

蓮池 タカオ

昔々のこと

私が六才頃の話なので、随分と昔のことだ。七十二年も前のコト。

当時、私の家、家といっても六軒棟続きのハーモニカ長屋。そのとぼつ口に住んでいた。

北国、雪が二メートル以上降る豪雪地帯で、地図の上から見ると、青森県のすぐ南、岩手県と秋田県の県境、とに角山ばかりの辺境であった。空は山に囲まれた船の底のように細長く、何も無い集落で、五十世帯ほどの家々がべったり肩を寄せ合っていた。

長屋なのでトイレも流し(台所・調理場)も共同であった。小学生の頃、母の体調が悪く私がこの流し場で米をといだ時のこと、米がサラサラと水と共に流れていった。初めての経験で、どうしていいのかわからなかった。

「タカオちゃん、お米が流れて行くよ。」と、隣ん家の

オバサンが親切に米をとぐことを教えてくれた。

生きるには、食せねばならない。その為には、まずご飯を炊く、その前にお米をとがなくてはならない。小学一年生の頃かなあ。

子供心に知った初めての人生修業だ。まあその頃はそんなコトは全く感じなかったけど。

いなくなった犬

隣に元気なオジサンが住んでいた。

そのオジサンは大きな黒い犬を飼っていた。子供心に大きく見えたその犬も、今でいう中型犬か大型犬の間ぐらいの大きさであったのだろう。愛嬌のある犬で、私にはすぐ慣れ、私も好きになって可愛いがった。

半年近く見かけたその犬が、ある日突然いなくなった。

どうしたのだろう。どうしていないの？その辺を探したが見つからなかった。

夕方、隣のオジサンが仕事から帰って来たので早速聞いてみた。

「オジチャン、あの犬どこへ行ったの。」

・・・「食った。」

最初、何のコトがよく理解できなかった。犬を食べた。・・・そんなコトあるの？。

昭和二十六・七年当時食糧事情はよくなかった。食べられるモノ、食出来るモノなら何でも食べたのがその時代だったのだ。

山に行けば、山菜、ワラビ、ゼンマイ、キノコ、蒨、アケビに山葡萄、野イチゴ、運よく出会えて獲れるものは全て、口に入れた。

集落には、キノコ採り名人とか、冬には雪の中、罌で野ウサギを手に入れてくる名人もいた。

かくして犬はいなくなった。先日、TVで中国の大きな祭で犬が店先に何十頭も積まれているのを見て、犬を食する文化は普通なのだ。というのをしみじみ理解した。

ま、昔々の話ですが・・・。当時こんな言葉を普通に聞いた。一赤、二黒、三白。何？・・・。

## 人間ばんざい

畑 昌子

昨日の雨がうそのように晴々とした、文化の日――。犬を飼いはじめてから毎朝の散歩はかゝせなく、雨の日も風の日も、犬に曳かれてしぶしぶ歩いているが、いつの間にやら足がスムーズに動くようになった。空ちゃんいいこだネ。娘がなけなしのお金で買った犬の名は、空海、おそれおおくも真言宗開祖、身分を問わない学校も設立した。不思議なもので、どこの犬より、いゝ男だと自負している。犬は外で飼うもの、まして上着を着せたり、家の中で飼うなんて―そんな私の意見も二日で崩れ……。娘の言うがまゝの日常である。

世の中は殺戮、戦争、ドロボー、混沌とした世相の中……何かすまぬと思ひながら小さなこの幸せを想う――。どうしたの！ 違うじゃないこのペンの持つて行き場は！ もう一つの心が語り出す……でもネ――文化の日に海で釣りをするけど、つった魚

は海に帰すので「ママさんにおみやげなし」……？ 店の客に言われた。チョットいじわるな笑顔に、私これを書きたかったと思う。人間いゝね！ いろいろあつて。

着ぶくれて舌でころがす金平糖

## 危険な、泣き声

畠山正樹

今年のゴールデンウィークの最終日は5月7日の日曜日であつた。丁度、一年前から私は毎日の昼食は外食でと決めていたのであつた。それは、家内が体調を崩して入退院や手術が重なっていたからであつた。このゴールデンウィークに入ってから、この街の人の動きが緩慢になったような印象を受けていたのだが、最終日の7日となると国内ばかりでなく海外旅行をしてきた人たちが帰って来たのであるう、人通りに活気が戻って来たと感じながら駅の方に向かって歩いていたのであつた。

江ノ電の高架線を右上に見ながら左手にはコンビニがある辺りで、前の方から大声で泣く女の子のすさまじい泣き声が耳に入ってきたのであつた。その泣き声は耳というより心に突き刺さるような激しいものであり、このままでは引き付けを起こしかねないと思うほど聞きなれない激しい泣き声であつたのである。どうなっているのだろうかと心配しながら前に進んでいったのだが、OPAという多くの専門店が入っている雑居ビルの先の方の歩道で父親の腕からのけぞり反って車道にはみ出さんばかりの勢いで激しく泣いている二、三歳かと思われる女の子が目に入ったのであつた。この辺りは、一段と人通りが多くなっていたのだが女の子の泣き声は周囲を圧倒する激しいものであつた。父親と一緒にいるのだから声の掛けようも手の出しようも無かつたので、私が右手に二人を見ていた時、赤ん坊を胸に抱き車輪の付いた旅行カバンを押しながら母親が追いついて来たのであつた。

ああ、これで一段落がついたのかと思ひながら私は駅に向かって十メートル程進んだのであつたが、依然として女の子の泣き声は落ち着くどころか

更に激しいものになっていたのであつた。何があつたのだろうか、何が起こっていたのだろうか、どうしてあげたらいいのだろうか、と思ひながら人込みの流れに沿って足は前に進んでいる時に、泣き声の中から『オジちゃんイヤー』という言葉が発せられたのであつた。私の足は止まりチョット左寄りに体を寄せて道を開けたのであつたが、その所からは女の子と両親の姿を見ることが出来なかつたのであつた。

この声を聴いて私の胸は痛んだ。あれはパパではないのか？？？ オジちゃん？？？ では、ママの胸の中にいる赤ちゃんは？？？ と複雑な思いに捕らわれてしまっていた。それにしても、あの激しい泣き方から早く解放して貰わないと危険なことになりかねないと思ひ配が募るばかりであつた。どうか、平穏な日々を送ってくださいと祈るばかりである。

## 「ありがとう」と云われて

林 田 繁 雄

「親孝行、したい時には親はなし、さればとて、墓に布団は着せられず」

このセリフ、御存知ですか？

小野安二郎監督の「東京物語」を見ている方なら、気付かぬはずはないでしょう。映画の後半に差しかかり、母親が列車内で急病になった時、更に、母親の臨終に間に合わなかった時と、二度に渡って鉄道員の三男に云わせているのです。

ちょっと人生を分かったような余裕の響き。実際に、何だか使ってみたくなるではありませんか。

「墓に布団は着せられず」映画の細部は忘れても、この云い回しが浮き上がって来ます。それだけ魅力的な言葉です。

では彼は、どこでこの言葉を仕入れたのでしょうか。何か資料の中から見つけたか。グーグルで調べても、東京物語の例しか載っていません。

返って来たのが、

「ありがとうならいもむしやはたち」

「？」ポカンとしてしまった。

二度程、繰り返されて、何とか見当がついた。「有難トウナラ、芋虫やハタチ」

「蟻が十なら、芋虫や二十」

虫の大きさを年令に当てはめているのか！

ハジメテ聞いた、このナンセンス。おもしろくて、頭の中を何度も何度も繰り返す言葉。

伯母は、誰からこの言葉を聞いたのだろう、伝えられたのだろう。初めて知った、父から聞いたこともない。タイミングだって肝心だ。直接、人から云われて、言葉が破裂することの素晴らしさ。今度は、私が誰かに発してやろう。

付け足しを。「蟻が鯛なら、芋虫や鯨」

私は推測します。

実際にどなたかの臨終の場に立ち会うことがあって、近しい人から直接聞かされた。その具体的なイメージに、映画で使いたいと思ったに違いありません。（着物を使った云い回しもあるのに布団を選んでいます）

実は、私にもそういう経験があるのです。

もう一週間で百歳まで生きたはずの元氣な伯母との話です。九十過ぎまで家政婦として働いた伯母とは滅多に会うこともありませんでしたが引退して老人ホームに訪ねるようになってからは、父の話、関東大震災の話、すぐに時が過ぎました。般若心経を唱える時の力強い声。

亡くなる前年の真夏の暑い日に訪ねた折でした。

一緒に飲もうと、冷えた缶ジュースを持ち込みましたら、館内の涼しいこと、これでは、伯母が腹をこわすと、テーブルに置きました。そろそろ飲み頃と缶ジュースを手にとると、テーブルが水滴で、水びたし。

アラアラ何か、と顔を上げるとティッシュが、目の前に。「アラッありがとう」と礼を云うと、即座に

## 姪のフォトウエディング

松 本 実知子

（てっせん）

弟から来たメールは、長女のフォトウエディングの知らせだった。姪は新郎と共にブライダル写真を撮り、その後親族の食事を催す予定とのことだった。婚礼披露の会は、二子玉川高島屋にある写真館で行われる。二時から洋装で、四時からは和装での撮影会となり、その後カジュアルな食事会となる流れだった。

指定の日は二週間後だが、あいにくなことに有償ボランティアで働いている当番の日だ。しかし、この祝い事には参加せずにはいられない。仕事仲間交替してもらわなくては。夫の出席の可否も確かめよう。

急いで数人に問い合せたが、メールに返信の無い人や、メールアドレスの登録間違いであたふたしてしまった。しかし、二日がかかりであったが、無事交



替してもらえた。良き仲間の存在を有難く思う。

次の心配は、平服でとの記述だ。正装でと言われても大変だが、平服でお洒落な服とはどんな装いが良いのか。人によって考えは千差万別だろうし、アクセサリーも何を付ければ良いのだろうか。三月三十日は、暖かいのか冷えるのか。この季節、気温は日によって大分変わる。コートは薄手が良い。上着は考えるまでもなく、お洒落なものは何も無い。何年か、セーターやTシャツといったカジュアルな物しか買っていない。ハンドバッグも古い黒のバッグが有るだけだ。

最終的には、レース柄の上着に紺のズボン、青のバッグを新調。締めて一万円程で上った。平服で、という言葉は素直にとることにした。夫は都合が合わず、欠席となった。

フォトウエディングなるものといえば、新郎新婦の和、洋装の晴れ姿を写真館の人が撮影する。その後、七人の親族全員もスマホで写真を撮るのだ。

写真館のスタッフが撮影時、

「もう少し寄り添ってください。新婦さんは、旦那さんを見上げてください。良いですよ。その表

情、素敵です」

等々、手や足の位置、顔の角度に色々と注文を付けるのには驚いた。特に花嫁には、体勢や表情にも細かく指図し、あおるように話しかけて、素敵なフォトに仕上げようという熱気が感じられた。

「あー、疲れた」と言う花嫁の言葉に実感がこもり、少々同情してしまった。

一休みした後は、おしゃれなレストランへ移動。ビールを少々飲み、凝った前菜、お造り、唐揚げ、鍋、雑炊、杏仁豆腐等々、とても食べきれないご馳走をいただいた。おしゃべりにも花が咲き、あつという間にお開きの八時になっていた。幸せのお裾分けを頂いた気分だった。

素敵な一日をありがたうと、新郎新婦に胸の内で語り掛け、急ぎ帰路についた。

## 感動すること

松 与 常 清

自分は何一つ、才能にも何も取り得べきものがない。現在七十五歳だが、人生経験もこれといって身につけているものがない。喉もと過ぎれば熱さを忘れるのである。その代わり自分で言うのもなんだが、感動することだけは人並みだと思っている。人間美、自然美、芸術美に対し一応人並みには感動している。この感動することを取り去ったら自分には何も残らないのだ。生きる意味さえあるだろうか。人並みに感動できることで鼓舞される。苦しいことや悩みがどんどん襲ってきて死をも思ったりする絶望の時もあるが、感動の至福を感じる時もある。人間美、自然美、芸術美に触れ得た時の感動といったらない。たとえ人生否定、人間否定に陥いる事があってもいつの間にか人生肯定、人間肯定になっていることに気付くことがある。それは愛する女性に出会った時に生きる力を得ることに似てい

る。真つ暗だった人生が愛の力によってパツと明るくなることに似ている。

愛することと感動することは何と似ていることだろう。飛躍するかもしれないが、人間美、自然美、芸術美への感動も一つの愛ではなからうか。愛とは感動とは対象への肯定、讃美ではなからうか。

それらは生きる力、鼓舞をもたらしてくれるのではなからうか。精神の高み、魂の高みへと運び連れていくってくれるものではなからうか。

自分は感動すること以外には何もできない。それでもそれによって救済されているのかもしれない。人は美しいものに魅かれるものだろう。美しい人間、美しい自然、美しい芸術。美しいものに心洗われ、感動することによって肯定、讃美する道へと歩き出すのではなからうか。

七十五歳まで生きて感動することだけしかできない自分だが、心身ともに老いを感じもする自分だが、感動することはフレッシュな思いにもさせてくれる。

この年になってまだときめく思いも残っている。老境、余生という思いにはまだ到っていないが、感

動するということだけは忘れてはいけないと思う。  
人間美、自然美、芸術美に死ぬまで感動し続けた  
いと思っている。

これから先のことも神様だけしか御存知ないのだ  
ろうが、積極的成り行きまかせで、美しいものに感  
動し続けていきたい。

どんなに苦しいことがあっても悩むことがあっても死  
にたいと思うような絶望感に陥っても感動すること  
によって打破し鼓舞されていきたい。

感動することによって、どんな状況も乗り越えて  
いけるのではないかと思っている。

そんなことは出来っこないよという悪魔の囁きにも  
負けず。

## ハーモニカ クラス

儘田 加寿子

月二回のハーモニカクラスがあります。そのク  
ラスの生徒になりました。

電話をかけた時、まさかクラスに入れてもらえる  
とは思いませんでした。

多分、年令で断られるのが、当り前とっていま  
した。息子いわく。「お母さん、先生は気持の大きい  
人だね。ぼくだったら即く断るよ」と言い、自分か  
らやめてはいけないよと、いいました。

月二回の土曜日の午前中教室へ通っています。ク  
ラスは十人ほどで、ベテランばかりで、みんな楽し  
そうに練習しています。

ハーモニカは簡単だと思っていたけれど、さにあ  
らず、むずかしい楽器です。

子供時代、ハーモニカは習いません。

友人達とハーモニカを吹いたことはあっても、遊  
びの場です。そんな私をクラスの人は暖かく迎え  
入れてくれました。

二年の月日が流れました。

ハーモニカは、むずかしい楽器です。

でも、あの小さな楽器から、すばらしい音色が出る  
ものだと、感心しながら、練習しています。いつか、  
クラスの人達と一緒に、私の故郷の「椰子の実」を  
演奏したいです。それが私の願いです。

## 瀬戸大橋回想録

森 眞彦

昭和三〇年五月十一日、濃霧をついて高松港を出  
港した国鉄宇高連絡船「紫雲丸」が僚船と衝突して  
沈没した。そして修学旅行生ら百六十八人が死亡す  
るという大惨事となった。この紫雲丸の事故は、私  
が高松市立紫雲中学校二年生の時であり、校舎の屋  
上から多くの小船が救助にあたっている様子を眺め  
ていた。この事故がきっかけとなり、一段と本州と  
四国の上に橋を架けるという運動が燃えあがった。

その後、紫雲中学校から高松高校を経て京都の大  
学へ六年間通うことになった。その間は宇高連絡船  
にもっぱら乗船して帰省した。そして家族との別れ  
を惜しみ、また再会を喜んだ。その後、縁あって土  
木技術者として、昭和四十一年に当時の国鉄に就職  
した。そして東京と地方の転勤生活を繰り返して  
いた。そして昭和五十九年三月に本四公団に出向  
となり、瀬戸大橋の工事を担当する第二建設局に配

属となった。

実際に橋を架けるための組織、本四公団が設立さ  
れたのは昭和四十五年七月であった。当時すでに、  
本州と四国の上の連絡橋案の本格的調査が開始され  
ており、現在の三ルート、明石・鳴門ルート、尾道・  
今治ルート、そして、岡山と香川を結ぶ瀬戸大橋架  
橋は、児島・坂出ルートに決定されていた。瀬戸大  
橋ルートは道路と鉄道の併用橋であり、このルート  
の海峡部約十キロは瀬戸大橋として親しまれている  
吊り橋、斜張橋、トラス橋で結ばれる世界に例をみ  
ない長大橋梁群であり、わが国の橋梁技術の粋を結  
集して建設されるものである。このルートは昭和五  
十三年十月十日に起工式を迎え着工していた。

工事が完成したら、海中に沈んで人の目に触れる  
ことのない基礎の工事は、潮流が速く、深い海面下  
に頑丈な基礎を築くために並々ならぬ創意と努力が  
必要であった。着任した頃の工事現場は基礎工事が  
終わり、その上に建つ橋台や橋脚の工事が最盛期で  
あり、ケーブルなどの上部工工事にも一部着手して  
いた。着任して二年四か月の間、工事現場の巡回や  
見学者の案内には本四公団所有のモーターボートに

乗船して瀬戸内海を行き来していた。お陰で世紀の大プロジェクトを間近に見ることができ貴重な体験になった。瀬戸大橋は、昭和六十三年四月十日に、道路と鉄道の併用橋として同時開通した。

昭和六十二年四月に国鉄は分割民営化され、私は国鉄清算事業団に移った。そして昭和六十三年十二月に高松にあった資産管理部に勤務することになった。家族を東京に残して単身赴任したため、JR瀬戸大橋線にしばしば乗車することになった。

このように回想してみると、紫雲丸の事故から始めて、宇高連絡船の乗船、瀬戸大橋の工事参加、JR瀬戸大橋線の乗車と、瀬戸内海との縁の繋がりを感ずる昨今である。

## 引地川親水公園の散歩

山下一馬

人にはそれぞれ日常のリズムがある。私のリズムは朝5時起床、朝食後6時すぎに家を出て東海道線

で東京に通勤していた。退職後このリズムを継続することにして5時30分から引地川親水公園まで散歩を始めた。自宅から舟地藏公園まで約1km、交差点を渡って小糸川沿いに歩き、城下橋を渡って引地川沿いに親水公園に向かう。そこに小高い丘があり、丘の上から富士山が真正面に見える。ここで軽く体操をして、芝生の広場を通過して天神橋を渡り大庭スポーツ広場球技場、多目的広場、ドッグパークを折り返して、舟地藏公園の交差点を渡り家に戻る。約4kmの距離だが1時間30分くらいかけての散歩になる。4月から10月までは日の出時間が4時から5時台で明るく、11月から3月までは6時台で、5時30分からの散歩は懐中電灯を持たないと暗い。人によって冬の間は散歩時間を日の出に合わせてずらす人もいる。私も寒い日は布団にこもり、時間を遅くしたいと思った。しかし私の体内時計は日照時間に左右されず標準時なので変えないことにした。冬時間には満天の星空が広がり、北斗七星と北極星が見える。日の出時間が早くなると、毎朝富士山が姿を変えて見え、朝焼けに照らされ紅く染まったり、冠雪した雪が輝いたりする。親水公園は引地川

の西岸と東岸にまたがり、西岸には球技場、多目的広場、ドッグパーク、東岸には大庭神社のあるふるさとの森に面していて、湿生植物園、子供の遊具施設、藤棚がある。このあたりは湿地帯で小糸川と引地川により、大庭城跡の南東部に水が溜められると外堀となった。過去には大庭城の西側は横堀、堅堀、土塁で固められた難攻不落の城となっていた。

現在は遊水池で南側に田畑が広がる自然豊かな公園となっている。2月には梅の木が花を咲かせ、3月初めころから河津桜が咲き、4月には川沿いがソメイヨシノの桜並木となる。また小糸川沿いに土筆も出て春の始まりとなる。5月にはツツジ、フジ、6月には紫陽花、7月にはねむの木が花を咲かせる。

9月中旬には金木犀の香りが漂い、やがて秋の紅葉を迎える。毎朝いろんな人に出会う。健康のため、気晴らしにぶらぶら歩く人、ご夫婦で散歩、ジョギングする人、犬の散歩、友人と話しながら歩いている人、望遠レンズ付きのカメラを持って野鳥を観察する人。中には高齢で、毎朝公園に来ることができている証で、「ありがたい」と富士山を拝む方もいる。毎朝富士山の姿について話をする人に出会う。

その縁で世間話から、文学、歴史、音楽、今までに登山した山々、尽きることなく様々な話をし、脳が活性化される。この自然豊かな公園で川と森林の新鮮な空気を味わい、富士山の姿を拝みながら経験したことのない話を聞く。これは早朝ここに来たものだけの特権である。古稀を迎える私にとって、余生をより充実したセカンドライフへと導いてくれる。新鮮なエネルギーを補給し今日も一日が始まる。  
“The early bird catches the worm.”

## 「旧東海道五十三次」を歩く

山成健治

山口県の山陰地方の田舎で生まれ育った私は、小学校に通うようになると、片道、約三キロばかりの舗装されていない道を毎日、歩いて通った。登・下校には、各一時間近くを要したが、その間には、四季折々の草花や、トンボ、バッタなど、様々な昆虫類に出会うことが出来た。このため、当時の私



にとっては、通学すること自体が楽しみの一つであった。

妻は、北海道の帯広市郊外という、私とは遠く離れた所の出身であったが、私と同様に自然の中を散策することが好きであった。そうした私どもの所に、ある旅行社から「旧東海道五十三次を歩いてみよう」という案内が届いた。二人共、ウォーキングは好きであったので、「チャンス到来」とばかり、参加することにした。

旅の初日、一緒に歩く仲間を見ると、比較的若い人も居たが、中・高年の方が大半であったので、何となくホッとした。歩きが始まると、先頭には旅行社関係の方がマイクを持って、ガイド役を務めた。我々二人は、ガイド役の方の話を聞き漏らしたくなかったので、常に先頭集団に居るように努めた。

東京都内から神奈川県を過ぎる迄は、以前、私たちも歩いたことがある道を通ることが少なくなかった。しかし静岡県に入ると、初めて歩く道ばかりとなり、進行方向の左手には、太平洋が延々と広がるようになった。静岡県が、いかに海（太平洋）に面した県であるのかということを改めて実感させ

られた。

愛知県からは、海を離れて陸地を歩くことが多くなった。また、静岡県迄は聞き覚えのある地名が大半であったが、愛知県から先は、初めて聞く地名が殆どとなった。先頭集団を歩く顔ぶれも、静岡県迄の時とは違った人が増えていった。恐らく、海を中心とした静岡県迄の行程と、陸地ばかりの愛知県以降の行程とは、目にする風景のニュアンス等が大きく異なるので、それに応じて先頭集団の顔ぶれも、自ずと異なっていたのであろう。嬉しかったのは、予め定められていた途中の休憩地で、妻も私も、昔の仲間（友人）との旧交を温める機会を得られたことである。

出発の日から数えて四十八日目、最終目的地である京都の三条大橋に、何とかたどり着くことが出来た。

それにしても、東京―京都間を徒歩で歩き通すなどということは、今の時代においては、何と、大変なことであろうか。改めて、昔の方々の強さ、とりわけ我慢強さに、深く感じ入った次第である。

## 西田天香師

横田 佳代子

リーマンショックの時、主人の会社も大きな打撃を受けた。毎日毎日、これからのことを考え、胸がつぶれる思いであった。その時、西田天香師の孫である西田多戈止先生より一枚のお皿が送られてきた。そのお皿には、西田天香師が最も好んだ「無一物中無尽蔵花あり 月あり 楼台あり」の書があった。そのお皿を飾り、書を見ていく内に、「空には、美しい月がある。春になれば、美しい花が咲く」急に豊かな気持ちになり、命が甦ったように、明るくなった。

「人間はもともと無一物で生まれ、生命さえも、授かったものです。無一物、無所有こそ人間本来の姿である」「生命は与えられたものであり、従って、食は天から恵まれて与えられている」と、天香師は訓えている。

西田天香師は1905（明治37年）年「宇宙の

大生命の中にその身を委ねる」「生活を重視し、奉仕と経済活動を通じて平和の役に立つ」ことを願い一燈園を創設した。

洪沢栄一氏も「論語と算盤、道徳心を持って人の為に働き、経済生活に全力を尽くす」ことを教えた。洪沢栄一氏の教えを実践した稲盛和夫氏も、「宇宙の法則はすべてを成長発展させる方向へと導く」「人が心を磨き、素晴らしい人格を形成していけば、宇宙が支援してくれるのだ」と述べている。

タゴールが1916（大正5）年来日した。日本女子大学を創設した成瀬仁蔵教授、姉崎正治東大教授、洪沢栄一氏、大隈重信総理等が歓迎し、もてなした。その時通訳を務めた高良とみ女史は、後に、女性で初めての参議院議員となった。タゴールと盟友の、ガンジーを訪れ、直接、糸車（チャルカ）を恵与された。

高良とみ女史は、チャルカを日本のガンジー、アジアの聖フランシスコと呼ばれていた西田天香師に託した。2010年インドで開催された平和会議に、そのチャルカを西田多戈止先生が持参。ドライ・ラマが最初に糸を紡ぎ、137名が続いた。糸

は80メートルを超えた。

生きていると、困難な問題に直面する。その時、天を仰ぎ、朝日を拝む、鳥の鳴き声に、一輪の花にも、心が癒される。余分なものを捨てて、感謝の心で、最善を尽くして、笑顔で時を待つ。

「そうすれば、助けてくれる人が必ず現れる。そして、宇宙の大生命が必ず一番良い方向に導いて下さるから安心していて良い」と教えて下さっている。

天香師は、日常の生活における実践行として、トイレ掃除と懺悔を勧めた。トイレの掃除により下座の修行をし、懺悔によって、心を清めた。欲を捨てる事。光明祈願の生活、いつも明るく笑顔でいること。人様の幸せを願う徳の高い人々と共に活動することを勧めている。

100歳を超えた百長寿者(センチナリアン)の中に、超越的多幸感を持つ人が多いと言われている。それは現実の状況に左右されない幸福感であり、「今ほど幸せな時はない」といつも感謝の心で、微笑んでいる心境である。このような幸せな心境になれることを祈っている。

## 一話一句

吉田 邦男  
(文芸光風)

### 起承転結

私の座右の銘は、起承転結だ。起承転結とは漢詩の構成法のひとつで、起句で詩意を云ひ起こし、承句でそれを受け、転句で素材を転じ発展させ、結句で全体を結ぶ。転じて、物事や文章の順序・組立にも使ふ。常に身近に備へて戒めとする格言とは少し意味を異にするが、これが私の座右の銘だ。

中学時代の恩師岩波昭和先生の国語の授業を初めて拝聴したのは一年生の初夏の頃だ。担当の先生がお休みで代はりに来られたのが岩波先生だった。先生は国民服と云ふのだらうか、カーキ色の作業着にゲートルを巻ひてをられた。断つておくが一九六二(昭和三七)年頃のことだ。先生は六尺程の棒を巧みにあやつり、身振り手振りを交へて、

大坂本町糸屋の娘 姉は一八妹は一六 諸国大名

## 初秋の散歩

萬 眞 一

今年の夏は暑かった。9月に入っても35℃を超える日が多く、こんなに暑くてはとも散歩をする気にはなれない。家の中に閉じこもり、エアコンに助けられながら、ひたすら涼しくなるのを待っていた。

9月23日、窓を開けると驚くほどの冷氣が部屋の中に入ってきた。昨日のぐずついた天気と違い、空は青く澄み渡っている。

9月になってから、俣野別邸跡にある植え込みのオミナエシが気になっていた。早く行かないと花が終って可憐な姿が見られなくなると。少し遅いと思いがながらも、秋の七草を求めて別邸跡に出かけた。

陽の光が和らぐ午後4時前に着くと、すぐにオミナエシのある植え込みに行った。まっすぐ伸びた茎から出ている黄緑の枝の上に、黄色い小粒の花が集まり、上が平たい形で咲いている。光を受けて鮮

は弓矢で殺す 糸屋の娘は目で殺す と、起承転結の解説をされた。糸屋の姉妹はさぞかし美人なのだらう、一度で良いから目で殺されたいと思った。それからは先生の授業を拝聴するのが楽しみになった。好奇心が学習意欲を掻き立てたのかも知れぬ。将来は国語・国文法・江戸の文芸を学ばうと思ふやうになり、長じて先生のやうに生徒を惹きつける授業ができる教師になりたいと思った。「大坂本町」は江戸後期の学者、頼山陽或いは梁川星巖の作らしいと分かったのちも岩波先生への敬意は変はらなかった。

日々の雑務に追はれ、満足な教材研究もできぬまま教壇に立つやうになり初心を忘れかけたとき、起承転結を思ひ出す。これもやはり座右の銘だ。

近頃、教員のなり手がないと云ふ。長時間労働、理不尽な要求をする保護者、結婚相手に教員は除く等々ブラックな職業だからださうだ。

バス待てど来ず 大路の春遠し

やかな黄色を浮き上がらせ、時折吹くそよ風になびいている。

だが黄色く咲いているのは数本で茶色に変わっているものが多い。昨年より本数は少なく、背の低いカヤが茎の高さを半分以上隠している。今年は猛暑で手入れが出来なかつたのであろう。

すぐそばにはフジバカマもあったはずだが見当たらない。カヤの中を覗き込んでみたが見えないし、フジバカマを好むアサギマダラも飛んでいない。ここに来れば七草のうちの2つは見られると思つていたのに。

広場の下の方に入っていくと、風に吹かれて枝先の花が揺れている。ハギである。しなやかな枝が何本も伸びているが、今年は花が少ししか付いていない。

色は赤紫で、一つ一つは蝶々が羽根を広げたような面白い形である。大きさは1センチから1・5センチと小さく、数個が一緒にうつむくように咲いている。

別邸跡を出て東側の谷戸へと降りて行つた。この谷戸は小さな川が流れ、平坦なところは野菜畑に

なっている。小川に近づく、花のついている若々しいススキが風に揺れている。七草では尾花と呼ばれる。

川の対岸は荒地地になつていてクズが生い茂っている。花を期待しながら農道をゆっくり歩くと、見てほしいといわぬばかりに咲いているのが眼に留まつた。

クズの花弁の内側は赤紫色で外側は白みがかつている。大きさは小指の爪ぐらゐで、蝶々のようなマメ科特有の形である。この花が房になつて、フジを逆さにしたようになり、付根の方ほどよく咲いている。

秋の七草は4つしか見なかつたが、一番好きなオミナエシと、一番美しいと思うクズの両方を見た。花を楽しみ、空の青さとそよ風に癒された。ゆつくりと2時間近く歩き、閉じこもりから抜け出した気持ちになれた。

# 編集後記

## 短歌の部

加藤和彦

昨年(2024年)の夏の暑い日、一本の電話を受けました。何と、「文芸ふじさわ・短歌における編集委員を担ってほしい」とのことでした。

勿論、文芸ふじさわ短歌への投稿は、ここ数年行ってきたので、その存在については知らないわけではありません。しかし、編集委員を担うなんてことは、全く思いもよらないことでありました。

そうではありましたが、事情を知るにつけ、事務局としてはだいぶ追い詰められているな、との受け取りも出来ました。電話でのやり取りの過程で、そうだ、なぎさ短歌会と一緒にしている、鮫島美和子さんをお願いしたらどうだろう、との思いが生じました。

早速、彼女に声掛けしたところ、当然ビックリされましたが、私の受け止め同様に、事務局の困り具合を共有する状況に至りました。

そこで彼女から出された提案が、何と私と鮫島さん二人でお引き受けるのはどうだろうか、とのことでした。一瞬虚を突かれた感じがしたが、柔軟な考えだナ、と思われました。この、編集委員を二人で担う、との状況を事務局に伝えたところ、「是非引き受けてほしい」とのこととなりました。

## 川柳の部

宮塚 肇

元旦の夕刻の揺れに震源は何処だろう?とすかさず入れたラジオから「津波がきます今すぐ避難して下さい」と女性アナが連呼(AI音声?)している。まさかと思いがちでも海岸沿いの我が家である。半信半疑ながらの不安な気持ちに駆られ、テレビで震源を確認した。

「復興の足がかりにとボランティア」(権田藍)、「思いやり重ね支援の輪ができる」(尚風)、「底抜けの笑顔もあった災害地」(島津富弥)・・・年初早々の大地震そして秋の豪雨と災害のダブルパンチを受けた能登地方でした。

そして、「暑すぎて食べるも寝るもひと仕事」(吉野健司)、「温暖化海岸線が溶けていく」(雨宮則子)・・・年々苛烈さを増す温暖化は猛暑を超える酷暑をもたらしました。このままでは「近未来コロギまでも食材か」(ケイ)・・・食料自給率の低い日本にかねがね不安を感じているだけに妙な現実感さえ覚えます。

でも、「大谷に元気を貰うロスの街」(としを)・・・大リーグでの大谷翔平選手の連日の活躍から明るさと元気をもらえた一年でもありました。

二〇二四年は、五十五名の方からの応募がありました。その多くは高齢者でありましょう。「リハビリの一步一步が明日を呼ぶ」(深野いく夫)、「退院日有難いしか出てこない」(熊田松雄)・・・御体調を崩されたことを詠まれた句も散見され同年輩として、他人ごとではない切実さを感じます。

一方で、「朝さんば風が体を吹き抜ける」(愛子)、「生きて行く希望と夢を胸に抱き」(井上朗)、「がんばれと我が身をさする

新たに編集委員を担うに至った事情はこんな経緯ですが、もう一つの要素として、編集委員の役割は、個々の作品の誤字や脱字、その他誤りがないか点検する。そして印刷所に送るための清書することであり、優秀作の選歌等の役割は無い、とのこと。なぜこれを記すかと申しますと、二人は現在なぎさ荘にある「なぎさ短歌会」のメンバーでありまして、佐佐木信綱を曾祖父とする、大野道夫先生の指導の下、短歌を楽しむ一員であるということです。力不足ではありますが、うが、役割遂行に向けて取り組みますので、どうぞよろしくお願い致します。

さて、文芸ふじさわ五十九集に向けての、短歌応募数は二十四名・七十二首でした。各人各様に手書きされた歌を、印刷原稿用にまとめるステップは、鮫島さんと並行して進め、電子文書化すると共に、気になる点として、作者自身に確認したほうが良からうと思われる、八項目を事務局に報告いたしました。

初めてのことでなかなか困難な神経を使う作業でしたが、お陰様で、じっくり歌を読み込むことが出来ました、といったところでしょうか。

応募状況については、ここ数年このレベルですね。更に、登録サークル数も三団体にとどまっています。藤沢市内で活動している短歌サークルは、他に多々あると思われますが。

つまり、「文芸ふじさわ」への関心度・知名度をどう盛り上げるかが、これは不変の課題なんでしょう。

腰と肩」(松江文)・・・高齢者でも、己が身を労わりつつそれぞれお元気でおられます。

さらに、「人生ははかないと言いきく食べる」(市川嘉紀)、「おいしいね何でも噛める歯に感謝」(マリ)、「土用の丑に義務はないのに鰻食べ」(赤堀晶子)「禁煙のあの手この手も使い果て」(幡多純)、「食欲はないがお酒は別の口」(田中邦彦)、「大将の気分で開ける縄のれん」(戸澤千鶴)、「道の駅両手いっぱい句を買う」(古木光江)、「おいしいを分かち合えればさらに美味」(みゆき)・・・お酒も煙草もそして食べる方もまだまだ旺盛です。時には、「侘しさもまたごちそうと山の宿」(岡本昌代)、「食べる買う景色」(二の次バスツアー)「ケイ」・・・旅を楽しまれています。

しかし、「検査して異常見付けて恙ない」(井上朗)、「大安に検診結果聞きに行く」(小野敬子)、「老眼のメガネで足りず虫めがね」(水城茂子)、「老眼鏡ふえてひとつは首にかけ」(吉田節子)、「老化です医師の一言やる気折る」(西村雅子)・・・身体の衰えは避けられません。検診を怠りなくいつまでも元気でいたいものです。

「あじさいは忍者を越えて七変化」(菅沼雅彦)、「踏まれてもすぐ起き上がる草の意地」(妹尾安子)。「虹紡ぎ横糸にして明日を織る」(鈴木有)、「庭ごしのとなりの桜ひとり宴」(船越しのぶ)、「雨の日はドレミドレミのトタン屋根」(村田和彦)、「目の前を秋が横切る赤とんぼ」(村田憲治)、「土砂降りの中で耐えてる花一輪」(守田貴美子)、「カタツムリ勝手気ままなワンルーム」(玲和)・・・人の世はともあれ自然は変わらぬ行まいで慰めてくれます。「みんな違ってみんないい」(二〇二五年もそれぞれの思いを五七五に詠んだ佳句をお待ちしております。

(二〇二四年十二月)

## 俳句の部

堀 口 みゆき

今回は昨年に比べ、応募者が減少したことは残念ですが、俳句に寄せる関心が高まっていることは事実です。編集の段階で気づいたことは五句の中あるいは同じ一句の中に旧仮名と新仮名が混じっていることが挙げられます。ほかに感じたことは、疵のない句を作ろうとして難難な内容、平凡な内容の句をつくりがちになることです。今回、このことについて書かせていただきます。いわゆる、類想、類似性のある句といわれる句です。俳句は字数が少ないため、他者と類似した句を作ることが多くなりがちです。同じ物、同じ場面、景色を見た時に感じ方が似ていれば、同じような表現をしてしまうのは、珍しいことではありません。俳句、短歌のように言葉が短ければ短い程その傾向は大きくなりますので、無意識のうちに類似してしまします。他者のフレーズが頭の片隅にある場合、類似句になる可能性が高いのですが、それには二種類あると考えます。

- 1, 偶然に作品の内容が一致した場合
- 2, 故意に真似した場合

かつて、私の所属する結社「鷹」の吟行会で故飯島晴子氏達と等々力溪谷周辺を同行した際、仏足石の傍で句を作りました。その時、発表した句は「小鳥くる仏足石に水溜り」でした。しかし、その後、鷹誌にその句は載らず晴子氏の「小鳥くる仏足石に水湛へ」が載っていました。

下五の「溜り」か「湛へ」かの違いだったのです。私は尊敬

## 五行歌の部

鈴木 春野

「五行歌の部」へのご参加、ありがとうございました。昨年12月10日にノーベル平和賞が「日本被団協」に授与されました。私たち五行歌「ハマ風の会」の代表の松本希雲（94歳）は長崎で被爆、生涯忘れられない生き地獄を目にし、原爆病特有の症状にも、また死に対する恐怖、爆心地で見た幻影にも苦しめられました。大変な体験の最中お姉様の主治医で「この子を残して」の著書でも有名な永井隆先生との交流があり、励ましを受けたこともきっかけで現役リタイア後から語り部活動を続けて来しました。

語らないと  
知らないになり  
やがて  
歴史の中で  
なかったことになる

生存中に被団協が  
平和賞を受賞  
大きな喜びと同時に  
核廃絶への  
険しい道のりを思う  
(五行歌2首は松本希雲作)

平和賞の受賞は、その活動を近くで見聞きして来ました私たちにとりまして大きな喜びです。グローバル化した今、戦争は当事国だけでなく、その国と繋がっている世界中の経済にも甚大な影響があることを、ロシアのウクライナ侵攻でも実体験させられています。全てを破壊する戦争は、映像を視るだけでも、心には「恨み、憎しみ」しか残らないものと考えてしましますが、語り部の方々はそれを超越して平和へ

する飯島晴子氏の句が大好きでしたので、私の句が湘子師に落とされてもなぜか嬉しかったのです。そこには晴子氏へのリスペクトがあったからです。仏足石の場合、やはりこの水は「溜り」より「湛へ」がふさわしい。故藤田湘子師は暗黙のうちに私にそのことを教えたかったのではないかと今になって思います。

同じようなものにオマージュがあり、音楽、絵画等においても尊敬する作者の作品の影響を受け似た作品になることをさします。鎌倉の建長寺の境内には夏目漱石の句とされる

「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」 漱石 明治二十八年 九月六日  
が建っており、これは正岡子規の代表句ともいえる

「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」 子規 明治二十八年十一月八日  
のもとになっている句と言われ、両者が「愚陀仏庵」における親友であったことから友情で作られた句とされています。

類想であっても意図するところが違い卓越したものであれば、独自のものとして認めてもよいのではないかと思います。

の活動に取り組まれ続けておられ、その想いの崇高さに心から敬服いたします。

日本は今年、第二次大戦終結後80年ですが、今世界を見渡せば核保有国は多数で、覇権主義、自国第一主義のリーダーが多く、核使用の脅威にさらされています。世界で唯一の被爆国として、日本政府は世界平和にもっと力を込めて働きかけて欲しいものです。

語り部活動、平和運動が更に広がるようお願いながら、個人としても誰もが人間として、命の重さ、平和の尊さ、地球に住むありがたさに、もっと想像力を働かせる賢さが必要だと痛感します。

普段の五行歌の歌会では、時事問題をテーマにした「社会詠」の作品も多く投稿されます。身近な生活の中から生まれる五行歌は、「あの頃こういうことがあってこんな風に考えていたんだ」と、日記のように当時の社会や自分を振り返ることもできます。



## 現代詩の部

山田 美智子

「文芸ふじさわ」第五十九集を皆様のお手元にお届け出来る事に感謝申し上げます。

辰年は漢字一文字では「金」でした。悲喜交々な世の中にあって、文芸を愛される皆様には、どの様な一年間であったのでしょうか。今集の作品からひもといて参りましょう。

タイトルから思わず北欧を連想してしまいました。が、発祥の地はなんとバリのようです。「スノードーム」は、硝子越しにはなく、硝子のなかで見られる幻想的な世界を、現実から離脱した我が、現実の心象風景に詩的メタファを駆使し、表している作品のようです。終連の二行が良く効いています。「友よ」は、生きとし生けるものの命は、神様にしかわからないものである事を、あらためて気づかされます。命の大切さが伝わります。「ある日」の、フリンジをゆらゆらさせてのフリーズが、この作品の色香を表しています。ダンディな男性なのでしょね。ときめく思いが伝わってきます。「小さな思い出」は、幼い頃の自然に溢れた様々な体験が、心の栄養になっている事を教えてくれます。正に三つ子の魂百までですね。

「自分以外の誰かである理由」言葉数の少ない詩です。平明な一行に込められた感情が交差しながら、内面へ導きます。心や精神面の有り様は、情報量の多い現代社会において、多種多様に善し悪しを判断する間もない程、回り回っています。内向的に自問自答する時間が必要であり、自らの立ち位置を確かめる事も大切です。生きづらさは世の中を渡る上で、種々

の誘因により誰しもが体験する事ですが、山あり谷ありを、もがきながら、乗り越えていけるものです。作者がしっかりと立っている姿が見て取れます。四、五連の「も」と「は」の使い分けがこの詩の核。そつと見守ります。「辻堂新町の思い出」地域住民の方々との交流、親睦は日々の暮らしの中でとても大事な事ですね。最初の一步を踏み出す勇氣に拍手をおくりまします。「こんこん」、日本語は漢字、平仮名、母音子音といろんな表情を見せてくれます。音楽文字と音節文字が組み合わさった日本語はすばらしいです。イギリスのマザーグースの童謡を想い出します。声に出して口誦すると、なかなか遊びのようです。ふと、八木重吉の自然や折りの短い詩を思うのは私だけでしょうか。

皆様、これからも継続して書き続けて下さい。次集でまた紙面を通してお会いできますよう、心から願っています。

## 随筆の部

新田 愼 二

今回34名の応募があり、若干減となりましたが、昨年規模の応募者を保つことができました。応募者のうち27名の方が昨年に続いての継続投稿者で、今年も頑張って投稿されたことに敬意を表します。新規応募者が少ないのはこの冊子の課題で、冊子の存在、募集をしていること等を如何に周知させるか、せつかくこんないい企画があるのですから、市民として編集者として、スタッフの皆さんと共に考えたいと思います。

しかし作品を読む作業は、編集者としては実に楽しいことで、もうすっかりお馴染みの名前と文章が出てくると、旧知の人に出会ったような気持ちになり、さて今回はどんなテーマで語りかけてくるかとワクワクします。今回も身辺雑記、藤沢の歴史、文学者のこと、育てている野菜、旅行記、社会時評、平和への思い、友人のこと、若き日の思い出、など多彩にわたり投稿いただきました。高齢者の文章は、経験による専門性の高いものや、藤沢の歴史の詳述、よくぞお書きになったもので、多彩で味わい深く読ませていただきました。

いまやSNSの時代で、スマホなどで簡単に発信できるため、若年者の投稿が少ないのは予測されることですが、長文でさえAIなどの更なる進化により、文章が作られる時代となると、「随筆」など書く人がいなくなってしまうのでしょうか。

私はそう考えませんが、伝えたいこと、それを文章にまとめる、

その思いは決して失われることはないと思います。そこに随筆は存在します。「随筆」は作者自身が書いたものであって、他のなに人にも書くことができないものであるからです。個人にはその人の感性があり、歴史があり、発想があるからで、それは機械では代わりえないものです。書いたものを来年読み返して起こる懐かしさや愛おしさは、その時の作者自身であるからです。

この国は季節が豊かで、それらが次々に変化していくものですから、短いテーマの随筆が古くより親しまれてきたのだと思います、私たちは「枕草子」「方丈記」「徒然草」など随筆の名作に恵まれてきました。

随筆を書く流れは、「発想をめぐらす」「テーマを決める」「全体の構成」「出だしのことば」「文章のリズム感」「結びのことば」「題名」そして「もう一度読み直す」、そういった作業により素晴らしい文章が完成します。

どうかご精進くださり、来年もまた作品に挑戦していただくことを楽しみにします。

# 【俳句】

| 団 体 名     | 代表者名  | 会員数 | 集 会 日      | 場 所                        |
|-----------|-------|-----|------------|----------------------------|
| 一葦湘南句会    | 松井 恭子 | 24人 | 毎月第1土曜日    | 藤 沢 市 役 所<br>市民利用会議室       |
| 一葦藤沢句会    | 中根 美保 | 24人 | 毎月第2火曜日    | 藤 沢 市 役 所<br>市民利用会議室       |
| くくだち句会    | 原山テイ子 | 13人 | 毎月第3木曜日    | 湘南台図書館                     |
| 鷹辻堂俳句会    | 堀口みゆき | -   | 毎月第2/第3木曜日 | 吟行(第2木曜)/辻堂<br>市民図書館(第3木曜) |
| たけのこ会     | 永井かほる | 13人 | 毎月第2木曜日    | 村 岡 公 民 館                  |
| 天為湘南俳句会   | 内 藤 繁 | 70人 | 毎月第3日曜日    | 藤沢市民会館他                    |
| 渚 会       | 小泉 恭子 | 16人 | 毎月第1金曜日    | 辻 堂 公 民 館                  |
| 波 藤 沢 例 会 | 山田 貴世 | 35人 | 毎月第4水曜日    | 藤 沢 市 役 所<br>市民利用会議室       |
| はこべ俳句会    | 加藤 静子 | 12人 | 毎月第3木曜日    | 鵠 沼 公 民 館                  |
| 柊 俳 句 会   | 西野 洋司 | 16人 | 毎月第4水曜日    | 鵠 沼 公 民 館                  |
| 冬すみれ会     | 鈴木 絹子 | 8人  | 毎月第1日曜日    | 済 美 館                      |
| む か ご 会   | 石垣みち代 | 17人 | 毎月第1・第3水曜日 | 済 美 館                      |
| 無 名 の 会   | 高野 尚志 | 15人 | 毎月第2日曜日    | 吟 行                        |
| サンシャイン句会  | 堀口みゆき | -   | 毎月第1金曜日    | 藤 沢 市 民<br>活 動 セ ン タ ー     |
| は ま べ 句 会 | 堀口みゆき | -   | 毎月第4日曜日    | 辻堂市民図書館                    |
| みちくさ俳句会   | 大山 賢一 | 10人 | 毎月第4水曜日    | 藤 沢 公 民 館                  |

# ★サークル紹介★

(2024年11月現在)

# 【短歌】

| 団 体 名     | 代表者名  | 会員数 | 集 会 日                    | 場 所                    |
|-----------|-------|-----|--------------------------|------------------------|
| 新青虹藤沢短歌会  | 久保井 収 | 12人 | 毎月第3日曜日                  | 辻 堂 公 民 館<br>辻堂市民図書館   |
| 花 舟 短 歌 会 | 原 けい子 | 30人 | 毎月第2・第4火曜日<br>毎月第2・第4水曜日 | 善 行 公 民 館<br>明 治 公 民 館 |
| なぎさ短歌会    | 加藤 和彦 | 11人 | 毎月第3火曜日                  | 湘南なぎさ荘                 |

# 【川柳】

| 団 体 名     | 代表者名  | 会員数 | 集 会 日      | 場 所                    |
|-----------|-------|-----|------------|------------------------|
| 六 会 川 柳 会 | 小野 敬子 | 11人 | 毎月第2・第4火曜日 | 六 会 公 民 館              |
| なぎさ川柳会    | 深野いく生 | 7人  | 毎月第2・第4水曜日 | 湘南なぎさ荘                 |
| 鵠沼川柳同好会   | 宮 塚 肇 | 8人  | 毎月第2・第4土曜日 | 鵠 沼 公 民 館              |
| 辻 堂 川 柳 会 | 大久保近下 | 13人 | 毎月第3土曜日    | 辻 堂 公 民 館              |
| 湘南台川柳会    | 熊田 松雄 | 26人 | 毎月第4金曜日    | 湘南台公民館                 |
| 生きがい川柳同好会 | 森本 生雄 | 7人  | 隔月1回・不定期   | 生 き が い<br>就 労 セ ン タ ー |
| 川柳こぶしの会   | 松下 協一 | 11人 | 第 3 木 曜 日  | こ ぶ し 荘                |

## ～ ご協賛ありがとうございます ～

文芸ふじさわは、市民文芸の活動を盛り上げるため、長年にわたり発行しております。

文芸ふじさわ第59集発行にあたり、市内の団体・法人の皆様、個人の皆様からご協賛を賜りました。

皆様からの温かいご支援に心よりお礼を申し上げますとともに、今後とも本事業へ変わらぬご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

### 団体・法人ご協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

有限会社 アート稲元  
さら俳句会  
合資会社 関水スポーツ  
辻堂川柳会  
有限会社 豊元書店  
波俳句会  
有限会社 ユザワ文具

### 個人協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

|        |        |           |
|--------|--------|-----------|
| 青木 敏行  | 垣田 文子  | チズコ・W・クジラ |
| 雨宮 則子  | 神谷 章夫  | 富安 千鶴子    |
| 井口 鐵介  | 小池 貴瓊子 | 松下 協一     |
| 石井 明子  | 幸 葉    | 森 睦子      |
| 伊藤 美也子 | 塩崎 麗子  | 森田 順子     |
| 大澤 清水  | 清水 和徳  | 他 20 名    |

## 【五行歌】

| 団体名    | 代表者名  | 会員数 | 集会日     | 場所     |
|--------|-------|-----|---------|--------|
| 藤沢日曜歌会 | 橋本 圭子 | 21人 | 毎月第1日曜日 | 藤沢市民会館 |
| 藤沢火曜歌会 | 西田 明子 | 12人 | 毎月第3火曜日 | 藤沢市民会館 |

## 【随筆】

| 団体名  | 代表者名  | 会員数 | 集会日        | 場所      |
|------|-------|-----|------------|---------|
| てっせん | 神部ゆかり | 6人  | 毎月第2木曜日    | 明治公民館   |
| 文芸光風 | 渡辺 準  | 10人 | 毎月第1・第3火曜日 | 湘南大庭図書館 |
| はまゆう | 篠原 貴子 | 5人  | 不定期        | 長後公民館   |



Imagination & Creation Design

 有限会社 **アート稲元**

グラフィックデザイン  
イラストレーション  
キャラクターデザイン  
サイン広告(看板)  
セールスプロモーション  
映像制作  
WEBデザイン

お気軽にご相談ください

〒251-0002 神奈川県藤沢市大鋸1-9-3  
Phone: **0466-25-4019** (代表)  
E-mail: share@art-inamoto.co.jp (代表)

事務用品・書籍・教科書・紙製品

**(有) 豊元書店**

〒251-0052  
藤沢市藤沢1056(外商部)  
藤沢店 TEL 0466-26-2311  
外商部 TEL 0466-26-5111  
FAX 0466-27-1550

E-mail info@e-toyomoto.com  
URL <http://www.e-toyomoto.com>

有限会社

**ユザワ文具**

〒252-0812  
藤沢市西俣野2657  
TEL:0466-81-0088 FAX:0466-81-0052

営業時間：月～金(10:00～18:00)  
休業日：土日・祝日・定休日  
Email : yuzabun@cello.ocn.ne.jp

**SEKIMIZU SPORTS**

大会の盾、トロフィー及び記念品の  
ご注文を承っております！

営業時間 10:30am ~ 8:00pm  
月曜定休  
住所：藤沢市鵠沼石上1-3-1  
TEL 0466-26-3355  
FAX 0466-26-3530

**波 俳 句 会**

5・7・5で自分史を！  
主宰 山田貴世

誌代 半年 6000円  
一年 12000円

発行所  
〒251-0875  
藤沢市本藤沢1-8-7 山田方  
TEL/FAX 0466-82-6173

 ホームページは  
「波俳句会」で検索か  
QRコードで

第59集編集委員

俳 句 堀 口 みゆき  
渡 部 有紀子  
短 歌 加 藤 和 彦  
鮫 島 美和子  
川 柳 宮 塚 肇  
五行歌 鈴 木 春 野  
現代詩 山 田 美智子  
随 筆 新 田 愼 二

**文芸ふじさわ 第59集**

発 行 藤沢市  
(公財)藤沢市みらい創造財団  
問合せ (公財)藤沢市みらい創造財団  
芸術文化事業課  
藤沢市鵠沼東8-1(藤沢市民会館内)  
TEL 0466-28-1135  
FAX 0466-25-1525

編 集 文芸ふじさわ編集委員会  
発行日 2025年(令和7年)3月31日  
印刷所 (有)アート稲元

「無断転載を禁じます」